

『祠部職掌雜纂 宮門跡方貸附金一件』

藩法研究会 丹波篠山班

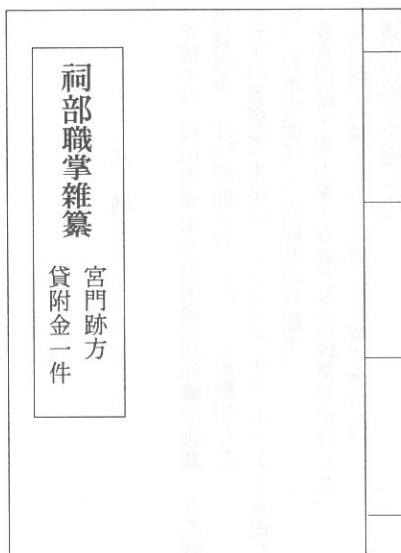
山 牧 橋
田 田 本
勉 勲 久

凡 例

- 一 本稿では、篠山市青山文庫所蔵『祠部職掌雜纂 宮門跡方貸附金一件』(祠部／六三／)を翻刻した。
- 一 各丁の表裏を、末尾に「オ」「ニウ」「ニオ」……のごとく表記した。白紙の面は、この記号のみ記す。
- 一 各宮門跡・堂上家・寺院ごとに仮番号を付した。
- 一 いは候、方はより、亦是等、ヒは被に改めた。
- 一 適宜、読点を施した。
- 一 「」および()内は編者の注記である。
- 一 朱書は「朱書」とし、『』で示した。
- 一 本書の複写・翻刻を許可いただいた篠山市教育委員会の関係者各位に深謝する。
- 一 翻刻および解題は、ひきつづき橋本が担当した。

〔表紙〕

〔篠山青山文庫 祠部／六三ノ〕



縦 27.3 cm × 横 19.8 cm

〔小口書〕〔祠部 宮門跡方貸附金一件〕

〔内扉〕〔朱印〕

篠山文庫

〔朱書〕

『菅沼下野殿より借写』

宮門跡方・堂上方、其外寺院等貸附金銀起
立之儀、向々より差出候書付、并村垣左太夫江相
達候訳書帳共写

〔二才
二ウ〕

菅沼下野殿

京都東町奉行菅沼下野守定喜

寛政元年〜寛政九年在職

(一七八九〜一七九七)

村垣左太夫

勘定吟味役・京都御用掛

天明八年〜寛政四年在職

(一七八八〜一七九二)

2

一

一 1

口上之覺

泰宮御方御賄方御入用銀御不足ニ付、近衛殿御役人
中江及對談候処、右御不足御合力難被成候ニ付、宮御方御名目を
以、御貸附銀被 仰立候ハ、右元銀之儀者、近衛殿より御借可被
進候間、被 仰立候様ニ對談相調、去ル安永十丑年二月久世
出雲守殿御在役中被 仰立御座候処、同年三月關東御聞濟ニ
相成、右御貸附銀拝借人上納相滞候節、東町御奉行江支
配人共申上候節、御取立之儀、外之御貸附よりも蔽敷御取立
被進候趣被仰渡候、
御貸附金高之高最初より相窺無御座候、

戊辰

五月

仙洞御所御勘定役
泰宮御方御附人御賄方
河副少監物

仙洞御所御勘定役
泰宮御方御附人御賄方

仙洞御所取次役

泰宮御方御用懸

虫鹿三河守

口上覺

青蓮院殿御修理金銀之儀者前々より被貸附置候ニ付、相滞候
節者御取立被進候様被成度段、元文年中二条表江御通達
之儀傳 奏衆江御書付を以被仰入置候儀ニ御座候、其後明
和元年甲九月 上々様方御遺金并於京大坂持寄講被
相催候、右懸銀等被貸附置候而、相滞候節者、其所々之御奉行

〔二才〕

近衛殿

右大臣近衛經熙

安永十丑年

安永十辛丑(一七八二)年

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明

安永六年(天明元年)在職

(一七七七-一七八二)

東町御奉行

京都東町奉行赤井越前守忠晶

安永三年(天明二年)在職

(一七七四-一七八二)

仙洞

後桜町上皇

宝曆十二年(明和七年)在位

(一七六二-一七七〇)

文化十(一八一三)年崩御

仙洞附 本間十右衛門季道

天明五年(寛政三年)在職

(一七八五-一七九二)

戊五月

寛政二庚戌(一七九〇)年

元文年中

一七三六-一七四一年

明和元年申九月

明和元年甲申(一七六四年)

所江御取立之儀、於江戸表御願被仰立候処、御聞濟御座候ニ付、
明和二年酉三月當御役所江御届被仰入候儀ニ御座候、依之
御祠堂御修理金銀と相唱来候儀ニ御座候、

〔二乙〕

御貸附金銀高之儀、於京都何程被貸付候与申儀者、而御役所江
下地御届被仰入候儀者無御座候、

右御貸附相滞候節、而御役所江御取立御頼被仰入候儀ハ、明和元
年江戸表江被仰立候、以前より相滞候節者而御役所江御取立
之儀御願被仰入、則御取立被進候事、

但拝借人相對之通不致返納、心得違等有之候節者、右拝借

人當御殿江罷出候様被仰付被進候様御頼被仰入候処、其節々

右拝借人江其方被仰付候ニ付、罷出候而、役人共及應對候儀御

座候事、

安永四年未十二月諸向御貸附之儀ニ付、傳奏衆より御觸御座候

故、翌年申六月下地之通御貸附被成度旨、傳奏衆江向以

御書附二条表江御通達之儀式御頼被仰入候処、同年七月

土井大炊頭殿より、御勝手ニ被貸附候様御達御座候旨、

傳 奏衆より御通達御座候事、

當時御貸附滞之口而御役所江御取立御頼被仰入置候口無

御座候事、

御知行所并御門前御境内等江被貸附置候儀も御座候得共、

此儀者前々より御届被仰入候儀も無御座候、勿論御取立御頼

被仰入候儀も無御座候事、

江州表江前々被貸附置候而先年都而御取立御座候処、其節残

之分年賦ニ相成、未年限中ニ御座候口茂御座候事、

明和二年酉正月

明和二年酉（七六五）年

安永四年未十二月

安永四乙未（七七五）年

翌年申六月

安永五丙申（七七六）年

土井大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年（安永六）年在職

（七六九）（七七七）

〔三才〕

一 當時御貸附之先々拝借人名前銀高等別紙之通ニ御座候事、

右之通就御尋為答役人共参上仕候以上、

戊辰

五月

外二
各所
附銀
高

青蓮院宮御内

伊丹飛驒守

〔三ウ〕

3

御口上覚

一 當御門室御貸附ニ相成候金銀何金ニ候哉、尤金銀之高相極有之候哉之儀、

一 右御貸附金銀相滞候節、御役所江被仰立候最初之詔、

一 當時御貸附之先々并滞口等御役所江被仰立候口之名前之事、

右御書附可被差出旨、御家来迄御達之趣、御門主被成御承知、左之通被仰入候、

一 御貸附ニ相成候金銀之儀、御門室御納戸銀ニ御座候、

但右御納戸銀御貸附之儀者、前々より御例ニ御座候処、安永四未年十二月

御觸之趣ニ付、同十五年五月御例之趣を以、傳 奏方迄被仰立候

処、同月十九日久世出雲守殿より御承知之段、傳 奏方より御申

達御座候事、

右之通相済候ニ付、同月廿五日東西御役所江、御使者御口状書

を以、御届被仰入置候、依之其後京都町家之もの江小々宛

〔四オ〕

青蓮院宮 尊真法親王

延享元（一七四四）年誕生

宝曆二年相統青蓮院

天保三年円満院相統

安永四未年十二月

安永四乙未（一七七五）年

同十五年五月

安永十辛丑（一七八二）年

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明

安永六年（天明元年）在職

（一七七七—一七八一）

御貸附銀被成候得共、追々致返上相滞候口々當時無御座候、

尤右御貸出之節々貸先名前銀高等之儀も御届被仰

入置候、右一件書留帳面等梨木、町御里坊ニ被差置候処、

一昨申年春京火災之節、當方御里坊も御焼失、其砌右

書物共悉焼失申候ニ付、委細之儀難相知御座候、

一久世出雲守殿より御承知候段、傳 奏衆より御達之書付并東

西御役所江御差出之御口状書、右之書者御本坊ニ相殘御座

候ニ付、則此度別紙写書被差出候、

右之通、此節京町家江御納戸銀御貸附之口并相滞候口々無御座

候、猶又此後御貸附被成候ハ、其節御届可被仰入候、依之右之段

以御使者被仰入候以上、

戊辰

五月

三寶院御門主御使

飯田備後介

御納戸銀御貸附ニ相成候銀高之儀者、時々増減有之元高ハ
相極不申、此段口上ニ而申述候様、御門主被申付候旨、備後介
申之候、

覚

天明元丑年五月十九日

一 傳 奏久我大納言殿より御門主御家来迄御達之書付三寶院

門跡納戸銀貸附之儀ニ付、家司差出候書付被遣之候、右納戸

銀之内、先達而被貸附候節、貸附先奉行所江被届置候分

返済相滞取立之儀被申立候ハ、外之宮門跡方貸附滞

同様濟方申渡ニ而可有之候間、此段御達候様ニと存候事、

〔四ウ〕

一昨申年春京火災之節

天明八戊申（一七八八）年

〔正月晦日洛東団栗の辻より出火、

禁裏炎上、二条御城焼亡、公家 武

家六十五宇、神社二百二十余、社、

寺院九百二十八箇所、塔七ツ、町

数三千百余、凡家数十八 万三千余、

土蔵八千百余、

『統徳川実紀』

久世出雲守

京都所司代久世出雲守広明

安永六年（天明元年）在職

（一七七七—一七八一）

三寶院御門主

高演准三后 鷹司閔白輔平息

安永二（一七七三）年生

寛政三（一七九一）年大僧正

天明元丑年

天明元辛丑（一七八二）年

傳奏久我大納言殿

正二位權大納言久我信通

安永五年（寛政三年）武家伝奏

（一七七六—一七九一年）

五月

同廿五日

一 東西御役所江御使を以被仰入候御口状書

御口状覺

三寶院御門室御納戸銀御貸附之儀、前々有来之
通被成度段、今般傳 奏方迄御書付を以被仰立
候処、當十九日久世出雲守殿より御承知被成候段、御
返答之趣、傳 奏方より當方江御達有之、御門主
御承知被成候、依之此以後御貸先名前并銀高
共御届可被成候間、万一相滞候儀も有之候節ハ、御取
立之儀、御家来を以可被仰入候間、猶其節宜敷
御取計之儀、御頼被仰入候、因茲以御使者、右之段
被仰入候以上、

三寶院御門主御使者

五月廿五日

田村藏人

〔五乙〕

右御口上状書

土屋伊豫守殿江 宅通

御使 田村藏人

出会 中井孫助

赤井越前守殿江 宅通

御使 右 同人

出会 木村九郎兵衛

右東西共御承知之旨ニ而、即刻相濟候事、

〔五才〕

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明

安永六年〜天明元年在職

(一七七七〜一七八一)

土屋伊豫守殿

京都西町奉行土屋伊豫守正延

安永七年〜天明七年在職

(一七七八〜一七八七)

赤井越前守殿

京都東町奉行赤井越前守忠晶

安永三年〜天明二年在職

(一七七四〜一七八二)

右之通御座候、

戊辰
五月

口上覚

圓満院御門跡御貸附金銀之濫觴者、正徳年中東山院第三皇子覚尊親王御住職中當御門室御小知故、至而御難洪御勝手向御取續も難被成候ニ付、御増知之御願被仰立候処、其砌関東 御幼君ニ付難被及御沙汰御時節も可有之段、御老中方より御返答有之候、然ル処正徳三年以上意、覚尊親王日光准后宮御附弟ニ被仰立候故、不被得止事御領掌被仰上候、就夫覚尊親王御思惟被成候所、圓門室如此之通ニ而者、後々御相續之御門主方始終御住職難被成候ニ付、日光江御移轉之後御無住中之御知行、院家并御家来致支配、毎年之御物成拂代銀を以所々江被貸附其利息を以、御勝手向不足被相補候様被成度旨、関東江御願被仰入候処、同年午正月廿四日所司代松平紀伊守殿より右御物成拂代銀御貸附之儀於関東御願之通御聞濟有之与永ク圓門御相續之基立ニ可致旨被仰渡候、右依御由緒其以來御物成拂代銀所々江御貸附被成置、其利足を以、專御勝手向之不足被相補候事ニ御座候、貸附金銀高之儀ハ御溜銀有之節者貸附候而、御入用之砌ハ取立申候、尤利倍之訳も有之故、銀高年々不同有之、一定難仕候、夫故以前より銀高何程迄被貸附候と相極候儀ハ無御座候事、

〔六才〕

〔六乙〕

正徳年中

一七一〇一七一六年

東山院 東山天皇

貞享四年（宝永六年在位

（一六八七—一七〇九）

覚尊親王 のち輪王寺公寛法親王

元禄十二（六九七）年誕生

同年入于円満院得度

正徳三年為輪王寺公弁親王附弟

正徳三年

正徳三癸巳（七一三）年

日光准后宮 輪王寺公弁親王

所司代松平紀伊守殿

京都所司代松平紀伊守信庸

元禄十五年（正徳四年在職

（一七〇二—一七一四）

右御貸附金銀相滯候節者、御役所江被仰立候、最初之訳ハ、先
祐常御門主御代寛保三年亥十月馬場讀岐守殿御奉
行之節、覺尊親王御願之御由緒御届被成候而より以

来、相滯候節者、其段被仰立候得者、則拜借人共被召出
御取立被成遂候御事ニ御座候、尤其後も御銀拜借人共
滯多御難渋ニ付、寶曆十年閏東江御觸流之儀御願被仰
立候處、同十二年五月御願之通御聞濟有之、則京大坂大津
等江御觸流有之、且閏東筋之者拜借相滯候ハ、於寺社
御奉行所御取立取進候儀、是又御願之通御聞濟有之候事、
當時御貸附之先々名前等早速可被仰入儀御座候得共、
前々より京都御支配之分者勿論、其外国々江手廣被貸
附、其最寄々を以、支配人取次手前ニ而、京都御支配之外
国々江も仲間合致融通、数寄宜方江ハ申合、相互ニ貸附取
組候事故、遠国者勿論、京都御支配之外国々ニ而も、右之子
細ニ付、入組有之、且支配人・取次共住所相隔候族多御座
候故、兼々御書出之儀難相成候ニ付、此儀者猶得と御調合
之上、追而御書付可被差出候事、

當時滯口等御役所江被仰立置候口々名前之儀者近々
御用達共を以、委細書付可被差出候事、

圓満院御門跡御使

戊辰
五月

仙石兵庫

曇華院殿御開山御祠堂銀、從古来有之、手廣被貸附候
儀ニ而者無御座、前々より御出入町家之内江御預置、右利足

寛保三年亥十月

寛保三癸亥（七四三）年

馬場讀岐守

京都東町奉行馬場讀岐守尚繁

元文四年（延享三年）在職

（七三九）一七四六

寶曆十年

寶曆十庚辰（七六〇）年

同十二年

寶曆十二壬午（七六二）年

寺社奉行所 寶曆十二年五月

寺社奉行毛利讀岐守匡平

寶曆十年（明和元年）在職

（七六〇）一七六四

寺社奉行松平和泉守乗祐

寶曆十年（明和元年）在職

（七六〇）一七六四

寺社奉行太田摂津守資俊

寶曆十年（寶曆十二年）在職

（七六〇）一七六二

寺社奉行酒井飛騨守忠香

寶曆十一年（明和二年）在職

（七六一）一七六五

寺社奉行島居伊賀守忠孝

寶曆十二（七六二）年在職

圓満院御門跡

寛政二年（七七〇）當時は門主不在

學尊法親王

正徳三（七二二）年輪王寺

公井法親王附弟となり江戸へ

覺諄法親王

天保三（一八三）年圓満院相統

銀を以御佛殿御修理并御法事等被成来候、安永五甲年御届被仰入候、其節銀高三拾貫目、三条通高倉西江入町岐草屋八郎兵衛与申者江被預置、右利足銀を以、年々御法事・御佛殿御修理被成来候、尤御名目を以、外々江貸附候儀、決而仕間敷旨、兼而堅申付置、右祠堂銀之儀、外方御貸附銀とハ品も替候儀ニ御座候得共、若差滞候節ハ御取立被為頼入候儀等被仰立置、其節土井大炊頭殿御承知被成置候旨、傳 奏中より御達御座候、今年迄右之通御預ケ被成置候处、此度御佛殿御造立御入用ニ付、御取立被 仰付、今度悉返上納仕、當時御預銀無御座候以上、

曇華院殿御内

寛政二年 戊戌 五月

結城筑後守印
結城甲斐守印
塚本 圖書印

當御殿御修理料銀并御臺所御賄銀御貸附、最初之儀者正徳四年御不勝手之趣、関東表江被為 聞召候付、金千兩被進候旨、同年十一月所司代松平紀伊守殿より傳 奏徳大寺殿・庭田殿江被仰遣、則御殿江御達有之、紀伊守殿御裏判を以、同月小堀仁右衛門殿より御金請取候处、右躰被為進候御金之儀ニ付、未々迄も御龜抹ニ仕間敷旨被 仰渡候故、御出入之町人共江御貸附利銀を以、御殿向御修理并御勝手向御入用御取賄被成来候处、宝曆年中ニ至、貸附先々之者共之内、返済不埒之者出来候故、同十

〔八才〕

〔八ウ〕

安永五申年

安永五丙申（一七七六）年

土井大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年（一七六六）安永六年在職

（一七六九～一七七七）

曇華院殿

曇華院

京都市右京区嵯峨北堀町

寛政二年戊戌五月

寛政二庚戌（一七九〇）年

正徳四年年

正徳四甲午（一七一四）年

所司代松平紀伊守殿

京都所司代松平紀伊守信庸

元禄十五年（一七三〇）正徳四年在職

（一七〇二～一七一四）

宝曆年中

一七五一～一七六四年

同十二年年

宝曆十二壬午（一七六二）年

二午年小林伊豫守殿・松前筑前守殿町御奉行御勤役之節、御修理料并御臺所御賄銀御貸附有之候間、相滞候者於御奉行所御取立被進候様被成度旨被仰入置、其以後相滞候得者、東御役所江御取立之儀御頼被仰入候儀ニ而、當時御取立之儀被仰入置候口々、別紙之通ニ御座候、故一品宮

桃園院様

仙洞様江和哥御師範被仰上候ニ付、明和二酉年より同六丑年迄關東より御賞米とシテ一ヶ年ニ現米百石宛被進從

御所も金式百両被進候付、右被進米金共前書同様向々江御貸附ニ相成候利足を以、是又御殿向御修復且御勝手向御臺所向等之御賄銀ニ相成候儀ニ御座候、

右之通、前々より致御貸附来候処、安永四未年御貸附有之候ハ、其度々貸附先キ名前御届被仰入候様、御達御座候付、其後新規御貸附有之候得者、其度々御届被仰入候得共、相對を以、利足相納、証文相改、又者返納仕、年賦濟等ニいたし候口々も御座候、日々出入御座候故、取調難行届、其上去ル^申甲年春火災御類焼之節、御貸附方

帳面之内致焼失候も御座候、碇と難相分御座候故、當時御貸高等も取極候而者、難被仰入候間、猶得と取調、貸附先々被仰入候節、銀高等も被仰入候様被成度候、

右之通ニ而當御殿御貸附之儀者、前々より之儀御座候得共、町御奉行所江滞口々御取立被進候被仰立候由、實曆

〔九才〕

小林伊豫守殿

京都東町奉行小林伊豫守春郷

宝曆三年ノ明和三年在職

(一七五三ノ一七六六)

松前筑前守殿

京都西町奉行松前筑前守順広

宝曆六年ノ明和元年在職

(一七五六ノ一七六四)

故一品宮

有栖川宮職仁親王

桃園院様

桃園天皇

延享四年ノ宝曆十二年在位

(一七四七ノ一七六二)

仙洞様

桜町院女二宮 緋宮智子内親王

宝曆十二年即位、明和七年讓位

(一七六二ノ一七七〇年在位)

文化十(一八一三)年崩御

明和二酉年

明和二乙酉(一七六五年)

同六丑年

明和六己丑(一七六九年)

安永四未年

京都大火

安永四乙未(一七七五年)

去ル甲年

天明八戊申(一七八八年)

十二午年之趣御日書拝見候得共、前書之通御貸附方
御日書等致焼失候故、委敷訖難相知御座候間、此段宜
御沙汰被進候様ニ頼思召候以上、

〔九之〕

有栖川宮御内

戊辰
五月

外ニ貸附金銀高名前書
港通

嶋津土佐守印

栗津伊勢守印

口上覚

此度被仰渡候御貸附ニ相成候金銀之詔ハ當御門跡之儀ハ
久々御無住ニ而御知行米代銀年々少々ツ、餘分御座候付、
右溜り銀を以、貸附いたし置、毎年御修復入用之節ハ、右
元利を以相用、猶又相殘候溜銀貸附候儀ニ御座候、最初より
金銀高相極候儀ハ無御座候、右金銀貸附候口々、又者相
滞候節、東西御役所江用達之者より御願申上來候處、
天明二寅年三月貸附銀口々相改候而、牧野越中守様江
御願書付、而傳 奏之御方迄差出候處、越中守様御承知有
之候而、町御奉行所江御通達被下候ニ付、貸附口々用達之者より御届
申上置相滞候節者、御取立御願申候事ニ御座候、當時貸
附口々并滞口銀高名前別帳之通御座候以上、

〔一〇オ〕

随心院御門跡御使

戊辰
五月

小 出 木 工

宝曆十二午年

宝曆十二壬午（七六〇）年
有栖川宮 織仁親王

戊五月

寛政二庚戌（七九〇）年

天明二寅年

天明二壬寅（七八二）年

随心院御門跡

寛政二年當時は門主不在

堯殿大僧正

天明九二七八九年寂

増護大僧正

二条左大臣治孝息

文政二（八一）年入室

下札。
御貸附之儀相願候最初年月等留無御座、難相分候得共、
前々より本文之ニ仕来候儀御座候、

外ニ貸附金銀高名前帳面書冊

覚

知恩院御門室御貸附之儀者、御宗門為御修字御代々御滯府
被為在候御手當補ニ被成置候、御參府御用意銀と被称候、尤
當御門室者關東御由緒有之候事故、元文四年未七月
所司代土岐丹後守殿御差圖之上取立置候儀ニ而御座候、則
御奉行嶋長門守殿東御役所江も御届御座候、其後安永
四年御觸御座候ニ付、同未壬十二月土井大炊頭殿江御届申上、
此御方之儀者御勝手向差操、余慶を以、右御勝手補ニ
相成候事ニ付、最初より銀高多少不相定候段被仰入候处、
別段御聞置被成候、則其趣御役所向江も御通達有之
候由、留書ニ相見申候、
一 右御貸附金銀相滯候節者、御月番御奉行所江其時々御取
立被仰入候儀、前々より仕来御座候、
一 御貸附先々以來可相届旨、安永四年御觸書を以、御一統江
御達御座候处、此御方之儀者同年未閏十二月土井大炊頭殿
江被仰入、前々仕来之通其時々ニ御届不申出候段、被仰立候
处、其段御聞置被成、御役所向江も御通達御座候趣、留

[102]

[110]

元文四年未

元文四己未(一七三九年)

所司代土岐丹後守殿

京都所司代土岐丹後守頼稔

享保十九年(一七四二年)在職

(一七三四—一七四二)

御奉行嶋長門守殿

京都西町奉行嶋長門守正祥

元文二年(一七四五年)在職

(一七三七—一七四〇)

安永四年

安永四乙未(一七七五年)

土井大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年(一七七六年)在職

(一七六九—一七七七)

書ニ相見申候、

右之通御座候、尤當時相滞申候而御取立被仰入候口者無御座候、万端別段之趣を以御取計被進候儀ニ御座候以上、

知恩院御門跡御内

松 室 舍 人

五月

口上覚

享保十八年十二月

證明院様為御遺物從閑東被進候御祠堂金貳百兩

并御境内諸堂舎及御殿御修理銀等御貸附相成、右利足を以

年々御法用御修理等之御入用相成候儀ニ御座候、當時御貸出之

金銀高、別紙帳面之通御座候、尤御修理金者從前々御貸

附之儀故、最初之年月元高等難相分候、右御貸附之度々東西

御目番之方江御届被仰入置、相滞候節者御取立御頼之御事

御座候、此度御尋ニ附御貸附之ヶ所、別紙帳面被差出候以上、

勸修寺御門跡御使

戊^辰五月

落 合 舍 人

外ニ^付通帳面金銀高右前書付
通帳面官冊

一乘院宮御貸附相成候金銀、何金候哉、尤金銀之高相極
在之候哉之儀、御尋之趣御承知被成候、

知恩院御門跡

寛政二年（七九〇）當時は門主不在

尊峯法親王

天明八（七八八）年寂

尊超法親王

文化九（八二六）年入室

享保十八年

享保十八癸丑（七三三）年

證明院様

伏見宮邦永親王姫宮、比宮御方

徳川家重御台所（正室）

享保十八癸丑（七三三）年逝去

勸修寺御門跡

寛宝法親王

安永四（七七五）年還俗

〔二二〕

〔二二才〕

一 一乘院宮御貸附之儀者、御殿御修理銀御貸附之事御座候、金

銀高相極在之候儀無御座候、

一 御貸附金銀相滯候節、御役所江被仰立候最初之詁、御尋之趣

御承知被成候、

右御修理御貸附相滯候節者、濟方之儀御役所江御頼被仰入候

事ニ而、外ニ詁合之儀者無御座候、

下ケ札
○

下札

本文被仰入候通、御貸附之儀前々より御修理銀御貸附被成候、安永四年御取
。ベリ被仰付、以後御貸附銀高并拝借人名前等貸附之度毎御届
被 仰入候、外ニ詁合与申儀者無御座候、

一 當時御貸附先之滯口等御役所江被仰立有之候口々名前相認

被差出候様可被成旨、御承知被成候、

右之儀者、安永年中ニ御貸附有之候者、其節々御届被仰入候様

御役所より被仰達候ニ付、其以来之御貸附者、其度毎ニ拝借人名

前銀高等御届被仰入候、

右留書等御里坊類焼之節紛失仕候、尤拝借人も類焼之者多

下札
○

在之候付、其俣ニ相成候、猶對談之上不埒ニ相成候ハ、追而濟方之

儀御頼可被仰入候、御役所江當時滯口被仰立置候儀者無御座候以上、

。 本文被仰入候通、御里坊類焼之節、拝借人共名前等書付帳面焼失

仕候付、難相知御座候、猶御糺之上相分り候ハ、追而可被仰入

候、

一 一乘院宮御内

安永四年

安永四乙未（七七五）年

安永年中

一七七二—一七八一年

一 一乘院宮

尊快法親王

宝曆十二（七六〇）年入室

寛政五（七九三）年叙一品、寂

五月十六日

北 森 大 学

11

一 御貸附相成候金銀何金ニ候哉、尤金銀高相極有之候哉之儀、

一 右御貸附金銀相滞候節、御役所江被仰立候最初之訳、

一 當時御貸附先々并滞口等御役所江被仰立有之候口々名前書

付可被差出旨御承知被成候、則左之通御座候、

〔二三才〕

享保十八癸丑十二月十九日

牧野河内守殿御役所江此御方御家来共御招ニ付、沢田主斗

罷出候處、

證明院様より御遺金貳百兩御目録被達金子、小堀仁右衛門殿より

為持被上候、

同十九甲寅正月十九日

牧野河内守殿江

口上覚

一 此度

證明院様より被進候御遺金、以後御貸附被成度候、御少知之御事ニ

御座候故、御知行御同事御太切ニ思召候間、入念御貸附可被成候得共、

若相滞候ハ、町御奉行所江御取立御頼可被成候間、右宜頼思召候以上、

〔二三ウ〕

靈鑑寺宮御内

正月十九日

沢 田 主 斗

右之通以書付御頼被仰入候處、河内守殿御聞濟被成進置候、尤銀高何

程御貸附可被成儀者不被仰入候、且又御貸附被成候節、拝借主并

銀子欠数等、是迄御届被成候御例者無御座候、

享保十八癸丑

享保十八癸丑（一七三三）年

牧野河内守殿

京都所司代牧野河内守英成

享保九年〜享保十九年在職

（一七二四〜一七三四）

證明院様

伏見宮邦永親王姫宮、比宮御方

徳川家重御台所（正室）

享保十八癸丑年逝去

同十九甲寅

享保十九甲寅（一七三四）年

靈鑑寺宮

宗恭、孝宮、後桃園養子

明和六年誕生、文化四年寂

（一七六九〜一八二二）

滯口御取立被仰立候書面留略

右之者共、此御方御貸附銀拝借仕罷在候、且又當時滯分御役所江被仰立有之候口々無御座候、尤相滯候口々も御座候得共、大變後之儀ニ御座候故、以御憐愍、此御方ニ而段々相對仕罷在候以上、

〔二四才〕

靈鑑寺宮御内

寛政二庚戌五月

座 田 伊 賀 守

花山院殿社金貸附之儀者先々

御所様方御寄付物并御方々所々より之寄付物相集候而

前々より貸附、其息物を以、年々社修覆等被致来候、安永

七年久世出雲守殿御役中、右社金貸附等之由来御尋有之、

差出候写、此度被差出候、

右社金銀之高之儀者、前々貸附有之口々無據筋ニ而返

弁滞有之候も有之候而、早速二者難相分候間、追而相調候

而可被申入候、

一

右貸附金銀相滞候節、御役所江御取立御頼被申候儀者、前々より

兩御役所江御月番江御頼被申候、近頃二者西御役所御月番之節

被申入候處、東御役所江被申入候様、御差圖有之、暫東御役所江斗

被申入候儀も有之候、

安永七年十二月久世出雲守殿より申来候御切紙之写老通

被差出候、

當時貸附先々并滯口等御役所江被申立候口々貸附、當

〔二四ウ〕

寛政二庚戌

寛政二庚戌（七九〇）年

安永七年

安永七戊戌（七七〇）年

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明

安永六年（天明元年）在職

（七七七—七八一）

時無之候、

花山院大納言殿使

戊辰
五月廿日

北 村 兵 庫

ふくさ包

安永七年御尋ニ付、久世出雲守殿江被差出候
花山院家社由來書并御寄付物書之写

花山院家社由來書并御寄附物之事

本社

宗像大明神

稲荷大明神

天石戸開神

外ニ二神

右合殿

宗像社勸請之儀者、延曆年中左大臣冬嗣公江依洛陽
守護之神託、則冬嗣公小一條之第江勸請有之候、

此小一條と申所者、唯今花山院家屋敷を往古東一條与申、
其向屋敷を小一條与申候、此両屋敷を傳來ニ而候事、

右勸請之後、貞觀元年正一位を授給ふ、元慶元年官
幣を被立候、其後

後宇多院御時 宣下有之、例年四度之官幣を被立候、

花山院大納言殿

正二位権大納言花山院愛徳

〔一五才〕

延曆年中

七八二〜八〇六年

左大臣冬嗣公

藤原冬嗣(七七五〜八二六)

天長二(八二五年)左大臣

貞觀元年

貞觀元己卯(八五九)年

元慶元年

元慶元丁酉(八七七)年

後宇多院 後宇多天皇

文永十一年(一一八四年)在位

(一一八四年〜一一八七年)

〔一五ウ〕

稻荷社

昭宣公之時御勸請、

天石戸開神江貞觀七年從三位を授給ふ、

東照宮御社

花山院家先代淳貞院前左大臣定好公と申者、

東照宮様御例ニ御座候、

一對様姉弟ニ而御座候、此一對様者、朝倉家外戚故、

東照宮様朝倉家御取立之思召被為在、右定好公を若干之

時より御招被為遊、朝倉式部与申、御側ニ御座候、其後花山院家

相續之方無之相成、定好公帰京、花山院家相續候、右之御

恩之故を以、定好公勸請候事、

末社合殿

命婦社

昭宣公之時、故有て誓をなし守護神と成て、右之社

地ニ住せしめ給ふ、此故を以て諸国之狐相隨候、

都合十七社也、

往古者、如右被授神位候御事茂有之、被立官幣候御事も

有之候、近來ニ而者、當社修理遷宮之節、從

東福門院様内々御寄付物被為有之候、

靈元院様

礼成門院様

新上西門院様

御寄付物・御初穂料、年々被為在之候、其外御方々所々より

之寄付物有之候事、

〔一六才〕

昭宣公

藤原基經(八三六〜八九一年)

貞觀十八(八七〇)年摂政

元慶八(八八四年)関白

貞觀七年

貞觀七乙酉(八六五)年

淳貞院前左大臣定好公

花山院定好 母朝倉金吾女

万治三(六六〇)年從一位

寛文元(六六二)年左大臣

寛文十三(六七三)年薨

東福門院様

源和子、徳川秀忠女

後水尾天皇中宮

寛永六(六二九)年院号宣下

延宝六(六七八)年崩御

靈元院様 靈元天皇

寛文三年(貞享四年)在位

(一六六三〜一六八七)

礼成門院様

孝子内親王、後光明天皇皇女

享保十(七二五)年院号・薨

新上西門院様

藤原房子、鷹司教平女

靈元天皇中宮

貞享四(六八七年)院号宣下

正徳二(一七二二)年崩御

右之通、傳來之社ニ御座候處、勝手方不如意ニ付、修復等難行届、無據右等之寄付物貸附候助力を以て、従前々修理致、相統候儀ニ御座候事、

花山院中納言稻荷被為修復、寄付物銀貸附先之儀、町奉行所江被相届、万一反済相滞候ハ、取立候儀可被申立旨被申聞候、右貸附先之儀、町奉行所江被相届候分、万一及遲滞候旨被申立候ハ、外之堂上方貸附滞同様取立候様、町奉行共江申渡置候間、此段御達候様ニと存候事、

十二月

外
延享五年正月十二日
高名前
御書

千種家貸附金之儀者、延享五年辰二月

至心院様薨去ニ付、為御遺金、故宰相中将殿被致拝領候貳百金

山城・大和・丹波・近江等四ヶ国江、右貳百金高貸附之儀御役所江

被申入候處、翌寛延二年巳正月御開濟有之候、尤右之節用

達笠原利右衛門・同与右衛門与申者江支配被申付候、其後右金子

滞有之候付、寛延三年午二月御取立之儀御頼被申入候處、日限

十日切ニ御申渡御座候而、右滞金早速被致落手候、其後利右衛門・

与右衛門等不埒之儀有之、退役被申付、其後井上重右衛門与申者江

暫用達被申付候、寶曆二年甲二月、右井上重右衛門退役被

申付、諸役扇屋藤九郎江被申付候、右藤九郎天明七年未八

月退役被申付、替之用達出来迄ハ千種家ニ而可被致差略候趣

御届被申入置候、

〔一六乙〕

花山院中納言 安永七年

正三位權中納言花山院愛德

延享五年辰

延享五戊辰（七四八）年

至心院様 於幸方

梅溪前中納言通条女

徳川家重側室徳川家治生母

延享五（七四八）年逝去

故宰相中将殿

從四位上千種有補

故前權大納言有敬卿男

実故前權中納言通条末子

享保二（七一七）年誕生

享保十六年為有敬卿子

宝曆十二（七六二）年薨

〔一七才〕

寛延二年巳

寛延二年己巳（七四九年）

寛延三年午

寛延三年庚午（七五〇）年

宝曆二年甲

宝曆二壬申（七五二）年

天明七年未

天明七丁未（七八七年）

貸附金滞御取立御頼被申入候節、日切最初十日切之處、利右衛門・与右衛門不吟味之筋有之由ニ而、十五日切ニ相成、藤九郎用達以後如何之様子ニ候哉、廿日切ニ相成候事、

〔二七〕

當時貸附金、別紙御座候、

右貸附金、最初被申立候案紙留致焼失文言月日等不分明候、大略残候帳面之分を以、被申入候以上、

戊辰
五月

千種宰相中將家
福井 竜 岐 守
外三條 附録高名前帳巻册

當家貸附金銀之儀、去ル寛延三年

至心院様為御遺金、梅溪家江金子千両被致拝領候節、出入町人共江

取次、貸附申付候、若相滞候節ハ取立御頼可被申越、御届申入被置

候儀御座候、則金銀名目御遺金ニ而御座候事、

下札
○

○

至心院様御遺金、梅溪家江被致拝領候節、貸附被致候趣御届被申入候儀、関東江被申立候哉、又ハ御所司様ニ御座候哉、町御奉行

〔二八才〕

所江御届被申候哉、類焼之節扣帳等致焼失、得与難相分

御座候、

右貸附金銀相滞候節、御役所江被申立候最初之訳、右之通

ニ御座候、尤先年より相滞候節、御頼被申立候儀も御座候得共、其節

之扣留帳等、一作年類焼之節致焼失、東西御役所何連

江相限候哉、相分兼申候、

右貸附滞口等有之候處、其節御役所江被申立、取引相済申

千種宰相中將

從二位參議兼左中將千種有政

寛延三年

寛延三年庚午（七五〇）年

至心院様 於幸方

梅溪前中納言通条女

徳川家重側室、徳川家治生母

延享五（七四八）年逝去

候ニ付、當時御役所江御頼被申立候口々無御座候、尤當時貸附先々滯口等、左之通御座候、

覺

一 貸附金銀高名前等七口有之留略、
右當時貸附有之候口々ニ御座候以上、

戊辰
五月

梅溪孝丸内

大 屋 主 水

覺

一 當家貸附相成候金銀者、納戸金銀ニ而御座候、尤高ハ増減御座候而、極候儀者一向無御座候、

一 右貸附金銀相滯候節、御役所江被申立、御取立之儀相頼被申候儀者、去ル安永三千年より御頼被申候、

下札〇

一 貸附銀最初之儀者、年久儀ニ而難相分候御取立御頼被申候儀者、安永三千年より追々御頼被申候、

下札△

一 當時貸附先々并滯口等御役所江御取立候儀御頼被申候分、別帳ニ相記被差出候、

一 當家之儀小録^{〔様〕}、其上知行所之内、水場も御座候而、暮方難渋ニ付

少々之有金も御座候得者、貸附置足物ニ而勝手向取續いたし被来候處、一昨年之大変當家類焼之上向々貸附先一統

相滯、火災場ニ而無之所々迄一切訳立不仕、甚以勝手向追々被及困窮候、御役所江度々御取立之儀御頼被申候儀、甚疑ヶ敷

〔二八乙〕

〔一九才〕

梅溪孝丸

梅溪行通

天明元（七八）年誕生

天明八（七八八）年叙從五位下

寛政四（七九二）年元服、聽昇殿、

文政七（八二四）年叙正四位上、

任參議兼左中將、辭任薨

安永三千年

安永三甲午（七七四）年

被存候得共、無是悲、追々出訴・追訴ニ而御取立之儀御願被申度被
存候間、何分宜御取計之儀偏頼入被存候以上、

五月廿日 平松三位使者 山本左膳

外貸附金銀高名前帳
冊

〔一九ウ〕

口上之覺

當院貸附金銀之儀、去ル寛延三年年關東より被致拜領候事ニ
御座候、右者至心院様以御遺金、御位牌殿御修復之助成、且御法事
等永ク無怠情相勤被申度候趣、去ル安永四未年土井大炊頭殿
御在役中、右貸附之儀於南都表貸附被申度候付、御願立被申
候處、則同年六月御開濟ニ而南都御奉行所江御通達被成下候趣、
御申渡ニ御座候ニ付、右貸附之儀、猶又南都表御奉行所江も當院
より委細之訳以書付被申入候事ニ御座候、

貸附金銀之高、最初より相窮無御座候、

右貸附相滞候付、去ル安永八亥年久世出雲守殿御在役中、南

都御奉行所江貸附取立之儀、宜敷御通達被成下候様、御頼

被申候筋も御座候、

於南都貸附支配人、左之通御座候、

〔二〇オ〕

滝野庄右衛門
石田三郎次

京都貸附之儀も、先年御願立被申候處、是又御開濟ニ付、於京地も
貸附被置候處、最早相済申候、併右貸附之儀ニ付、最初より之訳書

平松三位

正三位平松時章

寛延三年年

寛延三庚午（七五〇）年

安永四未年

安永四乙未（七七五）年

土井大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年（安永六）年在職

（一七六九）一七七七

安永八亥年

安永八己亥（七七九）年

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明

安永六年（天明元）年在職

（一七七七）一七八二

日記等、當院里坊ニ有之候間、一昨年類焼之節致焼失候付、否之儀相分リ不申候、尤當時京地ニ而貸附無御座候以上、

寛勝院大僧正殿内

高 橋 斎 宮

戊辰
五月

口上覚

當家貸附金銀込合之儀御尋ニ付申上候、

宝曆年中東竹相續之砌、從

關東御金千兩被致拝領、則御奉行所江右金子貸附被致候付、

万一相滯候節者、御取立被仰付被下度旨、御届被申入候儀御

座候、右往來之扣帳面等有之候処、焼失仕候付、委儀共相

知不申候、

安永四年未二月 天野近江守殿江、右貸附支配之もの共

不埒ニ付相改被申付候趣被差出候届書有之候ニ付、左ニ申上候、

當家為相續從 關東被致拝領候御金、先達而山本吉

左衛門・関利右衛門兩人之者江貸附支配被申付置候処、不埒ニ付、

此度清水九右衛門・坂上四郎右衛門兩人之者共江、右貸附支配

被申付候間、万一難渋之砌ハ、右兩人之者共より兩御奉行所江

御願罷出可申候間、此段兩御奉行所江御達之儀宜御頼被申

入度以使御頼被申入候以上、

未二月

東 竹 使 者

右御通達之儀御頼被申入、則支配兩人之もの共兩御奉行

〔二〇ウ〕

宝曆年中

一七五一〜一七六四年

東竹

未詳

安永四年未

安永四乙未（七七五）年

天野近江守

禁裏附天野近江守正景

明和四年〜安永六年在職

（七六七）（七七七）

〔二一オ〕

一昨年

天明八戊申（七八八）年

所江罷出、御届申入候儀ニ御座候、

一 當時貸附金銀并滞之口等一切無御座候、

右之通ニ御座候以上、

東竹家来

京極十左衛門

戊辰
五月

口上覚

一 御祠堂金貸附取組最初者年久敷事ニ而御座候得者、相知

不申候、

一 古来者貸附取組、最初者御届不申上候得共、相滞候節御

訴訟ニ相成候得者、御取立被 仰付被下候、然処安永四未年閏

十二月朔日東御役所江被召出、別紙之通御請書差上

申候、其以来御届申上候も又御訴訟申上候も東御役所斗

江罷出申候、則安永四未年差上候御請書、別紙之通ニ而

御座候以上、

外御祠堂金銀取書并其
知恩院役者

戊辰
五月

大 忍 寺印

御請書

安永四未年閏十二月朔日東御役所江差上候御請書之写

御請書

私共寺祠堂金銀、御寄付金銀、此外御位牌料等貸附滞

候節、御取立之儀御願可申上旨、先年より追々御願申上、是

〔二之〕

安永四未年

安永四乙未（七七五）年

迄相滞候節者、奉願御取立被 仰付被下候処、今日
被召出、是迄貸附置分者是迄之通御吟味之上御取立
被成下、今朔日より貸附取組候分者、其時々貸先金銀
高等も書付御届不申上置分ハ御取立不被
仰付候旨、右之趣私共ハ勿論、右金銀支配申付置候町
人共江も心得違無之様、得と可申渡旨被 仰渡候趣、奉畏
候、依之御請書奉差上候以上、

安永四未年

壬十二月朔日

金龍院役者

雍西堂印

高田御坊輪番

龍源寺印

三井寺学頭代

公文所

池田大藏印

三井寺

法明院印

知恩寺役者

天順印

御奉行所

御祠堂金高

五千七拾壹兩余

〔三才〕

〔三乙〕

安永四未年

安永四乙未（一七七五）年

右者

先帝様方 門院様方為御日供御膳料、御廟所御燈明料、毎月御忌日御正忌御法事料、

禁裏 院中 門跡方、從往古泉涌寺江御寄附金ニ

御座候、

一 御祠堂金五千七拾壹兩余

右京都・大坂ニ而貸附仕度旨、宝曆八寅年於關東奉願候處、

寺社御奉行所ニ而願之通御聞濟被仰渡候事、則其節御

觸流被成下候、右貸附相滞候得者、其御支配御奉行所

江御取立相願候様、於關東被仰渡候、勿論其訳當

御奉行所江も御届申上置候、且當時貸附金銀高、別紙帳

面ニ相認申候、貸附滞口有之節、當御奉行所江御願

申来候事、右之趣御尋ニ付申上候、

當時之貸附、右之通ニ御座候、貸附度々御届申上候儀者、

前々より不仕、相滞候得者、其口御取立相願候事、

右之通相違無御座候以上、

泉涌寺役者

戊五月

外二貸附銀高名前帳書册

戒光 寺印

照梅 院印

善能 寺印

照善 院印

観音 寺印

〔三才〕

〔三才〕

宝曆八寅年

宝曆八戌寅（一七五八）年

寺社御奉行所 宝曆八年

寺社奉行青山因幡守忠朝

寛延元年（一七五八）年宝曆八年在职

（一七四八）一七五八

寺社奉行本多長門守忠英

寛延二年（一七五八）年宝曆八年在职

（一七四九）一七五八

寺社奉行鳥居伊賀守忠孝

宝曆二年（一七五二）年宝曆十年在职

（一七五二）一七六〇

寺社奉行阿部伊予守正右

宝曆六年（一七五六）年宝曆十年在职

（一七五六）一七六〇

寺社奉行朽木土佐守玄綱

宝曆八年（一七五八）年宝曆九年在职

（一七五八）一七五九

以上のうち、月番が担当か

伏見宮
證明院様 御祠堂金銀貸附願書并口上書

伏見宮并證明院様御祠堂金銀貸附、宝曆六年子十

二月廿一日當御奉行所江御願申上候口上書、左ニ申上候、

乍恐口上書

當院之儀者、從往古 伏見宮様御菩提所ニ而、御代々御位牌、

其上 證明院様御位牌奉安置、御回向等朝暮無懈怠相勤

候、右牌殿為御修復料、御祠堂金銀被為附置候、并ニ

年々御備之御香曲差加貸附、右利息を以、御牌殿并當院

修復之助成ニ仕候、右御太切之御祠堂金銀之儀ニ御座候得者、

恐右貸附之儀御許容被為成下候ハ、難有可奉存候以上、

伏見宮御菩提所

相国寺塔頭

宝曆六年 丙子十二月

心 華 院

御奉行所

右之通御願申上候翌宝曆七年丑二月二日願之通

御許容被為成下候、

御祠堂金銀高之儀者、相極リ候儀無御座候、

證明院様御祠堂金銀之儀ハ、御遺命を以、從

伏見宮被為附置候、從

御公儀御寄附被為遊候与申ニ而者無御座候、

貸附相滞候節者、明和二年酉七月迄當 御奉行所斗江

御願申上候、同年七月より者、西 御奉行所江茂御願申上候、

〔二四七〕

證明院様 比宮増子

伏見宮邦永親王姫宮御方

徳川家重御台所(正室)

享保十八癸丑年逝去

宝曆六年子

宝曆六丙子(七五〇)年

宝曆七年丑

宝曆七丁丑(七五七)年

明和二年酉

明和二年酉(七六五)年

一

安永四年未閏十二月朔日於西 御奉行所、貸附仕候節者
御届可申上段被為仰付、其以來兩 御奉行所江貸附御
届申上候、

右之通相違無御座候以上

寛政二年 戊_戌五月

伏見宮御菩提所

心 華 院印

御奉行所

伏見宮御菩提所
御奉行所江貸附御
届申上候、

一 覚

一

當院より貸附仕候金銀之儀者、 御所御代々
尊儀御膳御供養料御祠堂等ニ而御座候、尤貸附仕候儀者、
何之比奉願候哉、享保年中類焼之節、書留等焼失仕候ニ付、
不分明ニ御座候得共、前々より貸附仕来候、

白銀三百枚

右者宝永七年二月

東山院様御牌前江、從

常憲院様御額御染筆為御礼御備被為在候、右被為御祠

堂貸附仕来候、

金三百兩

銀拾毫貫百八拾目

右者 御代々 尊儀御膳御供養料、從

〔二五才〕

安永四年未

安永四乙未（七七五年）

寛政二年戊

寛政二庚戌（七九〇年）

宝永七年

宝永七庚寅（七二〇年）

東山院様 東山天皇

貞享四年（宝永六年在位）

（六八七—七〇九年）

常憲院様 徳川綱吉

延宝八年（宝永六年在職）

（六八〇—七〇九年）

御所被為附候、
都合金三百兩

銀貳拾四貫八拾目

右御膳料等當時之高ニ御座候、尤御膳御供養料之儀ニ御座候
得者、時々相増候儀ニ御座候以上、

般舟院役者

真 珠 院

同 役者

珠 林 院

御奉行所

22

貸附ニ相成候金銀何金ニ候哉、尤金銀高相極有之候哉之儀、

一 右貸附金銀相滯候節、御役所江被申立候最初之訖、

一 當時貸附先々并滯口等御役所江被申立有之候口々名前

書付可被差出候事、

右御尋之趣被致承知候、從當家貸附被置候金銀無之候、仍

此段被申入候、

中院前大納言殿使者

五月

西 沢 主 斗

〔二五ウ〕

〔二六オ〕

般舟院 天台宗

京都市上京区今出川通千本東入
般舟院前町

中院前大納言殿 寛政二年

正二位前大納言中院通古

口上寛

今般名目銀貸附諸向先々名前等迄御改ニ付、於寺門も右等之銀子貸附等有之候ハ、委細書付可申上旨被仰渡承知仕候、寺門儀者、從往古資送銀等御座候得共、前以御奉行所江御頼申上置候而、名目銀等諸向江貸附仕候儀、曾而無御座候、尤銀子者一山并境内ニ預り罷在候、右御尋ニ付奉申上候以上、

〔二六ウ〕

戊辰
五月

寺門公文職

宇野少進法橋印

御奉行所

口上寛

貸附ニ相成候金銀有之候ハ、何金ニ候哉、金銀高江最初申上候訳等相認可差出旨奉承知候、御役所江申上、當院より貸附候金銀無御座候以上、

金地院役者

戊辰
五月

昇 宗

初 西 堂

御奉行所

〔二七オ〕

九條殿御納戸金御貸附ニ相成候、尤金高之儀ハ天明三卯年御觸之後者式千両ニ限り申候、尤其以前之儀者金高限り無御座候、

天明三卯年

天明三癸卯（七八三年）

一 右御貸附金銀相滞候節、御役所江被仰立候最初之儀、享保元年被仰立候、
 一 當時御貸附先々并滞口等御役所江被仰立御座候口、左之通ニ御座候、

御貸附五口金銀高名前留略

六月 九條殿御使 森 津 兵 庫

一 聖護院宮御貸附ニ相成候金銀何金ニ候哉、尤金銀之高相極有之候哉、御尋ニ御座候、此儀御貸附ニ相成候金銀之儀者、

〔二七ウ〕

從來 御所方より御門跡御代々之内、別而御由緒厚被為在候、御代々者御祠堂金并御遺金等時々御拝領

被為有候、右之銀子を以、御殿御修復銀と号、御貸附ニ相成候、且又御隠居所照高院御室、先年御無住

中之御物成、関東より被進之、則為御修復銀御貸渡之儀ニ御座候、尤金高相極候儀、無御座候、

一 右御貸附金銀相滞候節、御役所江御取立御頼被仰入、則御役所ニ而濟方等被仰付候事ニ御座候、別ニ誤

合等無御座候、

一 當時御貸附先々名前書付、別帳式冊被差出候、尤當時滞口等御役所江被仰立置候口々、則右帳面ニ

相記し有之候、

右之通御座候以上、

〔二八オ〕

九条殿

九条輔嗣

天明四（七八四）年誕生

寛政四（七九二）年元服、叙従五位上、聴禁色昇殿等、任左權少将、

叙従四位下

聖護院宮

盈仁准三后

戊戌
六月

外貸附高名前廳式冊

聖護院宮御内

富井主斗

安永四年未極月從久世出雲守殿御達之趣ニ而、傳
奏衆より御觸有之、御貸附之金銀此以後御貸附之分
書付被差出候様被仰達、則聖護院宮・照高院宮御修
復銀御貸附之儀被 仰入候処、久世出雲守殿御聞届
ニ而、右御修復銀相滞候節ハ是迄之通於町奉行所
御取立可有之旨、御達有之候、則右之段町御奉行
所江も御届被 仰入候事、

安永四年

未閏十二月傳 奏衆より御達書

攝家方・宮方・門跡方・堂上方より貸附金銀等當時貸附
有之分者、是迄之通ニ取斗、此以後被貸附候金銀之分、
拙者江達有之候様、御取斗可有之候、無據詛ニ而貸附
無之候而者、難相成筋ニ候ハ、其旨拙者より町奉行共江
可申渡候、貸附銀高・借主名前等、先々より町奉行所江
届置候様可被仰達候、尤届無之分者、返済滞候とも、
於町奉行所取立方不申付筈之旨、兼々向々江可被
仰達置候事、

未壬十二月

〔二八ウ〕

安永四年未

安永四乙未（七七五）年

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明

安永六年（天明元年）在職

（七七七—七八一）

聖護院宮

盈仁准三后

照高院宮

忠著准三后が天明八（七八八）年に

薨去した後、門主不在

〔二九才〕

安永六年

西ノ十二月傳 奏衆江被差出候書付享

聖護院殿御勝手向、從來御不如意ニ付、去ル延享年
中御願被仰立、御隠居所白川照高院殿御寺領御無
住中、御物成

公儀江相納候内を以、五ヶ年分被仰請、則其節無據御借
銀等之濟方ニ被相用、其余御貸附被成、右利息を以、
年々御寺御修復用ニ被相用度候付、則延享五年辰
二月牧野備後守殿江御届被仰入置、其以後、今以右銀
子為御修復用御貸附被成置、右利息を以、年々御修
復御手當ニ相成候事ニ御座候、且又當節御勝手向御不
如意ニ付、御領百姓御出入、町人共江被 仰付、去ル末年より
十五ヶ年之間、度々銀子持寄、右銀子御借受被成、御勝手向
當用ニ被相用候、然ル処御借受被成候百姓町人共江、追々
御返済無之候而者、及難渋候付、右御借受銀之内を以、去ル
末年より十五年之間御貸附被成、年々利積を以、御
返済被成候御事ニ御座候、右兩様之銀子無據御貸附被
成度候付、御届被仰入候間、万一借主及不埒返済相滞
候節者、御取立之儀武邊江御頼可被仰入候間、御取立
被進候様被成度候、尤御貸附先々借主名前等者、其
節々町御奉行所江御届可被仰入候、此段久世出雲守殿江
宜御通達頼思召候以上、

西十二月

聖護院宮内

藤本式部卿 印

〔二九ウ〕

安永六年酉

安永六丁酉（七七七）年

延享五年辰

延享五戊辰（七四八）年

牧野備後守殿

京都所司代牧野備後守貞通

寛保二年（寛延二年在職
（七四二）（七四九）

去ル末年

天明七丁未（七八七年

聖護院宮

盈仁准三后

〔三〇オ〕

油小路大納言様

久我大納言様

御雜掌中

安永七年

戊正月傳 奏衆より御達書

聖護院宮修復銀江百姓其外町人共江被申付、去ル未年より十五ヶ年之間、度々銀子持寄、右宮江被借請、右年限之間貸附、年々利積を以、返済有之候間、右両様之銀子貸附、万一不埒候ハ、取立之儀被申立度、尤借主名前等者、町奉行江届可有之旨、旧臘書付被差出候、右修復銀之儀者、是迄奉行所ニおゐて取立申付来候間、届有之候分、以来共是迄之通奉行所ニ而済方可申渡候、持寄銀之儀者、於奉行所取立難申付筋候間、其段御達有之候様ニと存候事、

正月

安永七年

戊正月兩御町奉行所江御届書

聖護院宮御修復銀、前以御貸附御座候處、此以後も御貸附被成度候、右借主返済相滞、万一及不埒候ハ、御取立之儀被仰立度候、尤借主名前等者、其節

[[三〇六]]

油小路大納言様

正二位權大納言油小路隆前

安永三年〜天明八年武家伝奏

(一七七四〜一七八八)

久我大納言様

正二位權大納言久我信通

安永五年〜寛政三年武家伝奏

(一七七六〜一七九一)

安永七年戊

安永七戊戌(一七八八)年

去ル未年

天明七丁未(一七八七年

節町御奉行所江御届可有之旨、旧冬久世出雲守殿江被仰入候処、右之通御承知ニ而、是迄之通於御奉行所濟方御申渡可有之旨、御達御座候、依之以来御貸附之節者、借主名前等御届被仰入置、万一不埒候ハ、御取立之儀御頼可被仰入候間、其節者御取斗被進候様被成度候、仍御使を以被仰入候以上、

戊辰
正月

聖護院宮御使

入 谷 左 京

一 照高院宮御貸附ニ相成候金銀、何金ニ候哉、尤金高相極有之候哉、御尋ニ御座候、此儀宝曆一年前御門主照高院御隠居之節、從 閑東為御修理料被進候銀

一 百貫目之内御貸附ニ相成候、尤金高相極候儀無御座候、右御貸附金銀相滞候節者、御役所江御取立御頼被仰入、則御役所ニ而濟方等被仰付候事ニ御座候、別ニ詔合等無御座候、

一 當時御貸附先々名前書付別帳老冊被差出候、此外丹州水上郡谷村ニ罷在候御用達有田林右衛門与申もの引請、但州城崎郡村々江貸附有之候、且當時滞口等御役所江被仰立置候口無御座候、

右之通御座候以上、

戊辰
六月

御貸附銀高名前帳老冊

聖護院宮御内

富 井 主 斗

〔三二才〕

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明
安永六年（天明元年在職
（七七七）（七八一）

聖護院宮

盈仁准三后

宝曆二年

宝曆二壬申（七五二）年

前御門主

忠養准三后

〔三二ウ〕

丹州水上郡谷村

兵庫県水上郡水上町谷村

〔三二末〕

安永七年

戊五月傳 奏衆江御差出書付写

去ル宝曆二年當御門主照高院殿江御隠居被成候節、為御修復料、從 關東被進候銀百貫目、其節御修復被相用候、其余銀、以來年々御貸附ニ相成、右利息を以、御寺御修復用ニ被相用候事ニ御座候、此以後とても如前々御貸附被成度候ニ付、御届被仰入候間、万一借主及不埒返済相滞候ハ、御取立之儀武邊江御頼可被仰入候間、御取立被進候様被成度候、尤御貸附先々借主名前等者、其節々町御奉行所江御届可被仰入候、此段久世出雲守殿江宜御通達頼思召候以上、

戊

五月

聖護院宮御内

佐々木備後守

油小路大納言様

久我大納言様

御雜掌中

安永七年

戊五月傳 奏衆より御達書

照高院殿江為御修復料、 關東より被進候銀御修復ニ被

〔三二〕

安永七年戊

安永七戊戌（七七八）年

宝曆二年

宝曆二壬申（七五二）年

当御門主

忠著准三后

久世出雲守殿

京都所司代久世出雲守広明

安永六年〜天明元年在職

（七七七〜一七八一）

油小路大納言様

正二位權大納言油小路隆前

安永三年〜天明八年武家伝奏

（七七四〜一七八八）

久我大納言様

正二位權大納言久我信通

安永五年〜寛政三年武家伝奏

（七七六〜一七九一）

安永七年戊

安永七戊戌（七七八）年

相用候余銀被貸附、先々之儀者町奉行所江被相届候分、万一返済及遲滞、取立之儀与申立候ハ、宮門跡方貸附同様取立之儀、町奉行共江申渡置候間、此段御達御座候様ニと存候事、

五月

安永八年

亥十月兩御町奉行所江御届書

御隠居所照高院室御修復銀御貸附被成度候間、万一借主及不埒返済相滞候ハ、町御奉行所江御届可被仰入候間、御取立被進候様頼思召候旨、去ル^度戊五月傳奏衆江被仰入候処、同月久世丹後守殿御開濟之段被仰達候、右ニ付、此已後御貸附之節ハ、銀高并借主名前等御届被仰入置、万一及不埒候ハ、御取立之儀御頼可被仰入候間、其節者御取斗被進候様頼思召候、仍御使者を以被仰入候以上、

亥十月

聖護院宮御内

森 山 左 内

廣幡殿貸附金銀何金ニ候哉之儀、御尋之趣被致承知候、此儀者、宝曆十二年十二月別紙写之通以書付御届被申立相済御座候貸附金銀ニ御座候、貸附金銀相滞候節、御役所江被申立候訳者、前文写

〔三六〕

〔三七〕

安永八年亥十月

安永八己亥（七七九年）

去ル戊五月

安永七戊戌（七八年）

久世丹後守

京都所司代久世出雲守広明か

（安永六年、天明元年在職）

聖護院宮

盈仁法親王

亥十月

安永八己亥（七七九年）

宝曆十二年

宝曆十二壬午（七六二年）

之通ニ而御届御聞濟ニ御座候、依之相滞候節御取立之儀、別ニ最初被申立候訳ハ無御座候、當時貸附金銀相滞候口茂無御座候付、御取立之儀御頼被申入候口者無御座候、右之通御座候以上、

〔三四才〕

戊辰
六月廿二日

廣幡大納言殿使
角 大 藏

宝曆十二年十二月七日被差出候書付之写

口上覽

廣幡殿領分江州野洲郡南桜村、野洲筋川普請年々難儀ニ候処、去ル丑年野洲川洪水ニ而堤壞、田地悉破損、甚及難渋候、依之今度川普請料為手當、百姓共持寄銀申付、致貸附置候、若難渋之儀も有之候節者、町御奉行所江相訴可申候間、御聞届御座候之様、武邊江御通達之儀被頼存候以上、

〔三四才〕

十二月七日

廣幡殿家

森 淡路守 印
上田和泉守 印

廣幡大納言様御内

雜掌名前

姉小路前大納言様御内

廣幡大納言殿

正二位權大納言広幡前秀

戊六月廿二日

寛政二庚戌（七九〇）年

宝曆十二年

宝曆十二壬午（七六二）年

江州野洲郡南桜村

滋賀県野洲郡野洲町南桜

去ル丑年

宝曆七丁丑（七五七）年

廣幡殿

正二位權大納言広幡前秀

廣幡大納言様

正二位權大納言広幡兼胤

寛延三年（安永五年）武家伝奏

（七五〇）（七七六）

姉小路前大納言様

正二位前權大納言姉小路公文

宝曆十年（安永三年）武家伝奏

（七六〇）（七七四）

雜掌名前

御貸附相成候金銀、何金ニ候哉、尤金銀之高相極有之候哉之儀、

右者從 関東被進金、御遺金・御納戸金・御修理金・御拂米代銀・御為遣銀等之金銀ニ而御座候、尤右金銀之高相極候儀無御座候、

右御貸附金銀相滞候節、御役所江被仰立候最初之訳、

右者前々より御貸附置被成候儀ニ而、相滞候節、御役所江御取立之儀被仰立候最初之儀者、去ル甲午御類焼

之砌、右等之書物等致焼失、當時難相分御座候、尤

安永四年御貸附之儀ニ付、御觸之儀御座候後、天明

五年十一月御貸附相滞候節ハ、御取立之儀町御奉行

所江御頼可被仰入旨、戸田因幡守殿御在役之砌被仰入

置候儀ニ御座候、右被仰入候節者、東西御役所之差別

無御座被仰立候儀ニ御座候、且又右拝借人返納相

滞候節、當御殿江罷出候様被仰付進候様、御頼被仰入、

拝借人罷出候節者、役人共及應對候上、訳立申付候

儀も御座候事、

當時御貸附之先々并滞口等御役所江被仰立候口々名前

御認御差出可被成事、

右者當時御貸附被成置候金銀并拝借人名前金銀

之高等、則別紙帳面被差出候、尤當時滞口御取立之儀

御役所江被仰立有之候儀者、無御座候事、

〔三五才〕

去ル甲午

天明八戊申（七八）年

京都大火

安永四年

安永四乙未（七五）年

天明五年

天明五丙申（七六）年

戸田因幡守殿

京都所司代戸田因幡守忠寛

天明四年〜天明七年在職

（七八四〜七八七）

〔三五ウ〕

八月

外貸附金銀高名前帳巻册

伏見殿御内

石田左膳

覚

京都御支配在町江 二条殿御貸附金之儀、先年

被仰立候处、金高貳千兩を限、御貸附被成候様、於關東表御聞濟御座候、尤其度々拝借人名前金高等、町奉行所江御届可被成之旨、天明三卯年十二月所司代牧野越中守殿より御達ニ御座候、

先年より御貸附三ヶ所御届落シ、且返納滞も有之候へ共、唯今右相對并御調中ニ候間、此段者追而可被仰入候事、

戊辰
十月十日

二条殿御使

松井内記

天明三卯年十二月所司代

牧野越中守殿より被達候御書付之写

二条殿御勝手向御不如意之上、御領分打續早損有之、御差支ニ付御拝借御返納錢千六百兩之分丑寅二ヶ年

御返納延、當年より百兩宛拾六ヶ年御返納可有之

处、又候去寅年御領分御損毛之上、臨時御物入多候ニ付、猶又當卯年より来ル子年迄拾ヶ年御返納延、且

〔三六ウ〕

〔三六才〕

伏見殿

伏見宮邦頼親王

天明三卯年

天明三癸卯（七八三）年

所司代牧野越中守殿

京都所司代牧野越中守貞長

天明元年（一七八四）年

（一七八一）（一七八四）

二条殿

正二位権大納言二条治孝

江戸・京・大坂江、金高式千両余御貸附之儀御願、右三ヶ所江御觸流在之候様被成度旨、委細御書付を以被仰立候趣、関東江相達候处、右御返納年延并御貸附金御觸流之儀者、不被及御沙汰候間、金高式千両を限、當地在町江御貸附、尤其度々拝借人名前金高等、町奉行所江御届被置、返済滞候節ハ町奉行所江可被仰達旨、年寄共より申越候間、得其意可被申上候以上、

卯十二月

〔三七オ〕

寛

二条殿御貸附金之名目、御普請金・御納戸金之内ニ御座候、是迄御貸附有之候金子、則右名目證文面ニ御

座候之事、

戊十月

御貸附銀之儀御尋ニ付、致吟味候处、則別紙之通御座候、尤安永五甲年御届被仰入、其後右御貸附銀相滞濟方不埒等有之候節者、御用達三人之者之内より御取立之儀御願申来候、猶此上宜御取扱御座候様被成度候以上、

一条殿御内

寛政二^{戊辰}年十一月

下橋左兵衛尉印
藪田 又兵衛印

〔三七ウ〕

卯十二月

天明三癸卯（七八三）年

戊十月

寛政二庚戌（七九〇）年
安永五甲年

一条殿
安永五丙申（七七六）年

從一位左大臣一条輝良
寛政二戊辰（七九一）年
寛政二庚戌（七九〇）年

御貸附銀御届書写

一条殿御勝手向從來御不如意之上、去ル寅卯兩年御領内旱損、皆無同前之不納、其後年々水旱損多、御收納相減、弥以御勝手向必至と御差支、御難渋ニ付、御領内百姓共先納銀并數年御立入之町人共御仕送銀等、役人共相對之上、去ル午年より五ヶ年之間、銀子御借請被來御當用御取續有之、余銀之分十五ヶ年之間年々御貸附、彼是を以御勝手向御助力ニ被成度候十五ヶ年相済候得者御領内并御出入町人共江無滯御返済被成下候儀御座候、依之無抛右御貸附被成候付、御届被仰入候、万一遲滞之節者可被仰立候間、御取立之儀御頼被成候、尤右御貸附引請人御出入町人之内、別紙名前之通三人相勤候付、彼者共より貸附先々町御奉行所江御届可仕候、此段宜土井大炊頭殿江御通達御頼思召候以上、

〔三八才〕

安永五甲年八月

一条殿御内

入江兵部少輔印

廣橋一位殿

油小路大納言殿

雜掌御中

別紙

一条殿

御貸附銀引請人

去ル寅卯年

天明二壬寅（七八二年）

天明三癸卯（七八三年）

去ル午年

天明六丙午（七八六年）

土井大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年〜安永六年在職

（二七六九〜一七七七）

一条殿

安永五年

從一位内大臣一条輝良

安永五甲年

安永五丙申（七七六年）

廣橋一位殿

從一位前權大納言廣橋兼胤

寬延三年〜安永五年武家伝奏

（二七五〇〜一七七六）

油小路大納言殿

正二位權大納言油小路隆前

安永三年〜天明八年武家伝奏

（二七七四〜一七八八）

大宮通五辻上ル町家号

菱屋

勝 茂兵衛

室町通一条上ル町家号

香具屋

小川忠兵衛

烏丸通上立賣下ル町家号

木屋

樋口助十郎

右之通御座候以上、

八月

一條殿御貸附銀之儀ニ付、別紙之通土井大炊頭殿江御届被仰入候、依之此以後別紙名宛御出入町人共より御貸附之先々町御奉行所江御届可仕候、右御貸附中者、宜御取斗之儀御頼被成度候間、此段町御奉行所江可然御通達御頼被仰入候以上、

〔三九才〕

一条殿御内

八月

入江兵部少輔印

廣 橋 一位殿

油小路大納言殿

雜掌中

〔三八ウ〕

八月

安永五丙申（一七七六）年八月

土井大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年（一七六四）安永六年在職

（一七六九—一七七七）

一条殿

從一位内大臣一条輝良

廣橋一位殿

從一位前權大納言広橋兼胤

寛延三年（一七六〇）安永五年武家伝奏

（一七五〇—一七七六）

油小路大納言殿

正二位權大納言油小路隆前

安永三年（一七八一）天明八年武家伝奏

（一七七四—一七八八）

口上寛

先達而町御奉行所江御届被仰入候御貸附銀之儀ニ付、
来ル十四日為御挨拶、月番町御奉行所江、從
一條殿御使被差出候、仍此段被仰入候以上、

十二月

一條殿御内

岡本左京亮

〔三九ウ〕

廣橋一位殿

油小路大納言殿

雜掌御中

先達而委細書付を以御届被仰入候御貸附銀之儀、彼是御取
斗之段御満足思召候、依之御用達共罷出候節、猶宜
頼思召候、右御挨拶旁以御使被仰入候、

十二月

一條殿御内

土橋八十郎

別紙

一條殿御用達

勝茂兵衛

小川忠兵衛

樋口助十郎

淨圓院様より御金拝領之寛

長番寺

享保十一午年六月九日

〔四〇オ〕

十二月

安永五二七七〇年

一條殿

從一位内大臣一條輝良

廣橋一位殿

從一位前權大納言広橋兼胤

寛延三年〜安永五年武家伝奏

(二七五〇〜二七七六)

安永四二七七五年叙從一位、

辭權大納言

油小路大納言殿

正二位權大納言油小路隆前

安永三年〜天明八年武家伝奏

(二七七四〜一七八八)

安永八二七七九年辭權大納言

十二月

安永五二七七〇年

淨圓院様

徳川光貞側室、徳川吉宗生母

享保十一二七七〇年逝去

享保十一年年

享保十一丙午二七七〇年

淨圓院様御逝去被遊候付、右為御悔巨勢大和守様・同伊豆守様・小田様江書狀差上候事、

淨圓院様より被下置候御金、惣高五百兩ニ而御座候、右之御金拝領仕候時節ハ、同年八月十七日町代傳

右衛門与申者口上ニ而申来候者、上田権右衛門被申候、明日六時小濱志摩守様御役所江可被罷出

候事、

翌十八日早朝東御役所江參上、即上田権右衛門殿御取次ニ而、於奥之小書院、志摩守様御申渡之趣、関東より

淨圓院様思召之趣申来、即御金相渡可申、尤御留守居年寄四人御連名之御狀耄封、信了院様小田様候事

御狀耄封御渡被成、此旨能々得其意致頂戴、則信了院殿より申參候趣、大切ニ可有執行と被仰渡候、

則次之御間江退出仕、上田権右衛門殿江對談ニ而御金五百兩落手仕候、其席江三井、元之丞持參即金子并関東より之御狀請

取證文、

請取申金子之事

金可五百兩也

右者、從

淨圓院様被下置候由ニ而、信了院殿より被差越候付、今日御渡被遊、慥請取難有奉存候、為其證文差

上申所如件、

享保十一年午八月十八日

長香寺立誓印

〔四一才〕

巨勢大和守様

巨勢大和守利啓(吉宗生母の甥)

同伊豆守様

巨勢伊豆守至信(吉宗生母の甥)

志摩守様

京都東町奉行小濱志摩守久隆

享保九年〜享保十二年在職

(一七二四〜一七二七年)

淨圓院様 巨勢八左衛門利清女

徳川光貞側室、お由利の方

徳川吉宗生母、

享保十一(一七二六)年逝去

享保十一年午

享保十一丙午(一七二六)年

御奉行所

江戸御留守居四人御方より連名之書状箱并信了院殿
より之状箱奉落手候以上、

同八月十八日

同寺 立誓印

御奉行所

關東江之御返書相認候而、御役所江持参仕候様ニ被仰渡候、
帰寺仕、即刻本寺智恵院江右之御金拝領之趣相届候様、
翌十九日早朝本寺よりも役者老人為使僧、御諸司牧野
河内守様并小濱志摩守様江御礼被申上候、當院住持も、

右御使僧ニ相隨、外ニ又西御役所本多筑後守様・上田権

右衛門殿各御礼申上候、此序ニ關東江之御返書相認、

則御役所江持参仕、御礼申上畢而、又昨日御對面之書

院江御召被成、志摩守様被仰候者、幸之時相見江候、今朝も

關東御老中より右之趣被入御念申来候条、弥太切ニ守護仕候

様ニ与被仰付候、

御留守居四人御方より書状之文言、

淨圓院様兼而

思召有之、光融院殿為佛供料金五百兩被遣、今度

信了院より文添、右御金差越候間、御請取信了院より

相達候之通被致承知、代々住職江申傳、年忌其外

法事之儀、且又牌前廟前之事、尤常々勤等永々

無怠懈可被取斗候、恐惶謹言、

〔四一ウ〕

御諸司牧野河内守様

京都所司代牧野河内守英成

享保九年〜享保十九年在職

(一七二四〜一七三四)

小濱志摩守様

京都東町奉行小濱志摩守久隆

享保九年〜享保十二年在職

(一七二四〜一七二七)

西御役所本多筑後守様

京都西町奉行本多筑後守忠英

享保八年〜元文二年在職

(一七三三〜一七三七)

〔四一オ〕

七月廿九日

仙石 丹波守

久尚書判

大久保下野守

忠位書判

酒井 隠岐守

可安書判

松前 伊豆守

嘉廣書判

長 香 寺

信了院殿より御文之文言

筆申入まいらせ候、

浄圓院様兼而 思召之趣御座候而、

光融院様永々の御佛供料として、此度金五百兩

被遣夫々、右之御金御受納被成、御年忌御法事

御牌前御廟之事、惣而常々の勤等ニ至迄、いつまで

もおこたり無やうに御心得代々後住の方江も

御申おくり候様ニ可被成候、其ため申入まいらせ候

かしく

七月廿五日

信 了 院

長 香 寺 様

御金拝領仕候ニ付、本寺智恩院より被申渡候文言

〔四二ウ〕

仙石丹波守久尚

留守居

享保九年〜享保十六年在職

(一七二四〜一七三二年)

大久保下野守忠位

留守居

享保八年〜元文二年在職

(一七二三〜一七三七年)

酒井隠岐守可安

留守居

享保八年〜享保十五年在職

(一七二三〜一七三〇年)

松前伊豆守嘉廣

留守居

宝永二年〜享保十四年在職

(一七〇五〜一七二九年)

一 筆申入まいらせ候

一 筆申入まいらせ候

浄圓院様 巨勢八左衛門利清女

徳川光貞側室、お由利の方

徳川吉宗生母、

享保十一(一七二六)年逝去

〔四三オ〕

淨圓院様兼而 思召有之、為光融院殿御佛供料、
今般金五百兩御寄附、後々之住持江申傳、御年忌其外
御法事之儀、且又御牌前御廟所之事、尤常々勤行等永々
無怠懈候様可仕之旨、其寺迄御留守居より御
連署并信了院殿より御文右式通、方丈御一覽之上
當山記録ニも被藏置候間、致秘藏差置、勤行等懈
怠有之間敷候、且御正當忌月并御年忌之節、御法事
之書付、毎度本江山可被差出候、尤其寺住持暮之砌
ハ、從本山人趣可申渡候、

右之趣、御丈室被仰出候間、法度申渡候以上、

本山人然誓了鑑上人御代役者

午八月

〔四三乙〕

源 光 院
保 德 院
法 然 寺
如 來 寺
上 善 寺
大 雲 院
淨 福 寺

長 香 寺

一 右光融院様与申者、

淨圓院様御聖父様ニ而、寛文十二子年四月十六日御命
終、即當院ニ御墓所有之候、依之

寛文十二子年

寛文十二壬子（六七）年

淨圓院様御在世之内も年々御書通ニ而、御佛供料等

被下置、御回向仕来り候、

右御金拝領之後者、例月御忌日ニ者、一山之僧衆集会法事修行、

又年々四月十六日正當御忌光ニハ、前日より別時念佛御當日ニ御斎

并施餼鬼法事等執行之御回向奉申上候、

右之御由緒御座候付、

淨圓院様御尊牌茂建置、例月之御忌日并正當御忌月

及御年回之刻毎々御回忌奉申上候、

右之御金拝領仕者、前住立替代ニ而御座候、病身ニ付、唯今者隠

居仕、弟子重誓致住職候、右之一件御尋被為遊候ニ付、記置

候之通書付奉備高覧候以上、

智恩院末寺

高倉

元文三年二月

長 香 寺

重誓

右者、

元文三年四月御諸司代土岐丹後守様御参府之節、

淨圓院様より當院江御金被下置候由緒、内々御聞被成置度旨

ニ而、中井主水殿御屋敷江向御聞合ニ付、當時六代以前重誓代、

右之書付を以奉備高覧候書付之扣ニ御座候、此度當寺祠堂貸

付ニ相成候最初之訳、委敷可申上被仰渡候付、上来之趣を以、

書付奉入御高覧候、

限而東御奉行所江御祠堂金ニ付、万事御願申候儀者、延享

〔四四才〕

元文三年

元文三戊午（一七八八）年

延享三寅四月

延享三丙寅（一七四六）年

寛政二戊五月

寛政二庚戌（一七九〇）年

村垣左大夫

勘定吟味役・京都御用掛

天明八年（一七八八）〜寛政四年在職

（一七八八〜一七九二）

菅沼下野守

京都東町奉行菅沼下野守定喜

寛政元年（一七九〇）〜寛政九年在職

（一七八九〜一七九七）

去ル四月晦日

寛政二庚戌（一七九〇）年

戊十二月十五日

寛政二庚戌（一七九〇）年

井上美濃守

京都西町奉行井上美濃守利恭

天明八年（一七八八）〜寛政三年在職

（一七八八〜一七九二）

三寅四月錦油小路帶屋治右衛門与申者、御祠堂銀濟方不
 埒ニ付、初而出訴仕候處、御召出廿日切被仰付、其後者切金ニ相成
 借り方唯一通り之銀子ニ相心得、一向返済不仕、甚迷惑仕
 罷在候處、其砌公事役真野嘉右衛門殿と申方、御取斗を

〔四五才〕

以、御祠堂金拝領之訳書相認、御奉行所江可差上旨、御内々
 被仰下、則嘉右衛門殿御取次を以、右之書付差上候處、御奉行弓場
 讃岐守様より御諸司牧野備後守様江被備御内見候而、其後又銀
 子借方御召出ニ而厳重ニ被仰付、即六月十一日迄ニ速ニ銀子皆濟
 仕候事ニ御座候、其節五月朔日御召ニ付罷出候處、讃岐守被仰
 渡候者、向後此御金貸附相滞、訴之事候ハ、限而當役所江罷出候
 旨被仰渡候、依之其以來東御役所ニ相定候事、

智恩院末寺

寛政二^{戊辰}五月

長香寺啓答

見出し

村垣左大夫江相達候儀ニ付申上候書付

菅沼下野守

〔四五ウ〕

去ル四月晦日申上置候宮門跡方・堂上方、其外寺院等より夫々
 名目を以貸附有之候向々取調、別紙帳面之通、村垣左大夫
 江相達候付、右帳面写老冊差上、此段申上候以上、

戊十二月十五日

井上美濃守
 菅沼下野守

去ル甲午 京都大火

天明八戊申（二七八八）年

一條殿

從一位左大臣一條輝良

安永三年

安永三甲午（二七四四年）

所司代土井大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年〜安永六年在職

（一七六九〜一七七七）

安永五年

安永五丙申（二七五五年）

二條殿

正二位權大納言二條治孝

天明三卯年

天明三癸卯（二七八三年）

所司代牧野備後守

京都所司代牧野備後守貞道

寛保二年〜寛延二年在職

（一七四二〜一七四九）

近衛

從一位右大臣近衛經熙

安永十丑年

安永十辛丑（二七八二年）

所司代久世大和守殿

京都所司代久世大和守廣明

安永六年〜天明元年在職

（一七七五〜一七八一）

『柳宮補任』は出雲守とのみ

〔戊〕
戊十二月左之帳面村垣左太夫江
相達

〔從〕
從一條殿長香寺迄東御役所ニ而取調之分
從閑院宮圓通寺迄西御役所ニ而取調之分

合帳ニ認

宮門跡方・堂上方・寺院等より貸附有之分起立之詔書帳

井上美濃守

菅沼下野守

宮門跡方・堂上方・寺院等より夫々名目を以、貸附有之分、去ル
甲年御役所帳面焼失、起立之詔等難相分、此度向々江相
尋候處、書面之通御座候、

一條殿

御勝手向御差支御難渋ニ付、御領内百姓共先納付銀并数年御立入
之町人共御仕送銀等、役人共相對之上、安永三年より十五ヶ年之
間銀子御借請被成、當用御取續有之、餘銀之分十五ヶ年之間
年々被貸附御勝手向御助力ニ被成度、依之右御貸附之儀被仰入
候間、万一遲滞之節ハ取立之儀可被仰立段、所司代土井大炊頭殿
御勤役中御通達之儀、且右御貸附中取斗之儀御頼被成度、御役
所江御通達之儀共、安永五甲年傳 奏衆江書付被差出、御納戸
銀与唱、銀高極無之被貸附、相滞候節者取立之儀御役所江被
仰立候旨、右御家来申之、

一條殿

天明三卯年金高貳千兩餘貸附之儀御頼有之、關東御開濟
有之候間、金高貳千兩を限り當地在町江被貸附、相滞候節取

〔四六才〕

九條殿

九條輔嗣

享保年中

一七六〇一七三六年

天明三卯年

天明三癸卯（一七八三年）

青蓮院宮 尊真法親王

延享元（一七四四年）誕生

宝曆二（一七五二年）相續青蓮院

元文年中

一七三六一七四一年

伏見宮 邦頼親王

去ル甲年

天明八戊申（一七八八年）

天明五己年

天明五乙巳（一七八五年）

所司代戸田因幡守

京都所司代戸田因幡守忠寛

天明四年一、天明七年在職

（一七八四一七八七）

立之儀御役所江被仰立候旨、所司代牧野備後守勤役中相達候付、御普請金・御納戸金之内を以被貸附候旨、右御家来申之、

近衛

泰宮御方

泰宮御方御賄御入用御不足ニ付、右宮御方御名目を以貸附之儀、近衛殿役人江對談之上、元金銀者近衛殿より御貸渡被進、安永十丑年所司代久世大和守殿御勤役中被仰立、関東御聞濟有之、金銀高其極無之被貸附、相滞候節取立之儀御役所江被仰立候間、右宮御附人御賄方河副少監物、同御用掛り虫鹿三河守申之、

〔四七才〕

九條殿

享保年中被仰立、金高者極り無之、納戸金被貸附、天明三卯年以來金高貳千兩ニ限り被貸附、相滞候節取立之儀御役所江被仰立候旨、右御家来申之、

青蓮院宮

御修復金銀前々より被貸附候處、相滞候節者取立之儀被仰立度段、元文中所司代江御通達之儀、傳奏衆江書付を以被仰入、其後明和元年^甲年

上々様方御遺金并於京都・大坂持寄講被催候掛ケ銀等被貸附、相滞候節、其所々之奉行所ニ而取立之儀、江戸表江被仰立候處、御聞濟有之、依之御祠堂御修復金銀与相唱被貸附、尤金銀高極無之候旨、右御家来申之、

〔四七ウ〕

但、御家領并門前境内等江貸附被置候儀者、前々より御届無之、勿論取立被仰付候儀も無之由、

伏見宮

聖護院宮 盈仁法親王

明和元(一七六四年)誕生
安永九年聖護院宮附弟
延享五辰年

延享五戊辰(一七四八)年
所司代牧野備後守殿

京都所司代牧野備後守貞道
寛保二年(一七六〇)寛延二年在職
(一七四二-一七四九)
安永六酉年

安永六丁酉(一七七七)年
所司代久大和守殿

京都所司代久世大和守廣明
安永六年(一七七五)天明元年在職
(一七七五-一七八一)
『柳宮補任』は出雲守とのみ

三寶院御門跡
高演准三后
安永二(一七七三)年生

寛政三(一七九〇)年大僧正去ル甲年
天明八戊申(一七八八)年
天明元丑年
天明元辛丑(一七八二)年

久大和守殿

京都所司代久世大和守廣明
安永六年(一七七五)天明元年在職
(一七七五-一七八一)

『柳宮補任』は出雲守とのみ
圓満院御門跡

寛政二(一七九〇)年門主不在 祐常
安永二(一七七三)年化 覺諄法親王
文政元(一八一八)年誕生
天保三(一八三二)年円満院相統

関東より被進金、御遺金、納戸金、御修復金、御拂米代銀、為御替銀等、
前々より被貸附、金銀高相極儀無之、去ル甲午年書物等致焼失
最初之訳難相分候得共、相滞候節取立之儀御役所江被仰立候
儀者、天明五己年所司代戸田因幡守在勤中被仰立候旨、右
家来申之、

聖護院宮

御隠居所照高院殿御寺領御無住中之御物成、

公儀江相納候内、五ヶ年分被仰請、御借銀等之濟方ニ相用、其余

被貸附、右利息を以、御修復用ニ被成度、延享五辰年所司代牧

野備後守殿御勤役中被仰立、其外御祠堂金・御遺金等前々より御殿

御修復銀と号被貸附候付、右御修復銀貸附返済相滞候節、

取立之儀被仰立度、安永六酉年所司代久大和守殿御勤役中

被仰立、御聞届ニ而相滞候節者、於御役所取立有之旨、御達有

之、尤右金銀高極り無之旨、右御家来申之、

三寶院御門跡

前々より納戸銀被貸附銀高増減有之、尤留書帳面御里坊ニ被差

置候處、去ル甲午年焼失、委細之儀難相分候得共、貸附之儀

前々之通被成度旨、天明元丑年傳 奏衆江書付を以被仰立、

久大和守殿御勤役中被御聞置、相滞候節者御役所江被仰立候由、右

御家来申之、

圓満院御門跡

正徳年中、御小知故至而御難渋、御勝手手向御取續も難被成、御増知

之御願被仰上候處、其砌

御幼若ニ付難被及御沙汰、御時節茂可有之段、御老中方より御返答

〔四八才〕

正徳年中 一七一〇～一七二六年
正徳三己年

正徳三癸巳（一七一二年）

宮御方 公澄法親王

安永五（一七七六年）誕生

寛政元年輪王寺公延親王附弟

寛政三（一七九二年）受禪

文化六（一八〇九年）隱居

日光准后 公延法親王

宝暦十二（一七六二年）誕生

安永六年輪王寺公遵親王附弟

安永九（一七八〇年）受職

寛政三（一七九二年）辭職

諸司代松平紀伊守

京都所司代松平紀伊守信庸

元禄十五年（正徳四年）在職

（一七〇一～一七一四）

寛保三亥年

寛保三癸亥（一七四三年）

寶暦十辰年

宝暦十庚辰（一七六〇年）

寶暦十二年

宝暦十二辛午（一七六二年）

墨華院殿

墨華院 京都市右京区嵯峨北堀町

安永五甲年

安永五丙申（一七七六年）

〔四八才〕

有之候處、正徳三巳年

宮御方、日光准后宮御附第ニ被仰出候故、御領掌被仰上候、就夫御思惟被成候處、圓御門主如此之通ニ而者、後々御相談之御門主方始終御住職難被成候付、日光江御移轉後、御無住中御知行院家并御家来致支配、毎年之御物成拂代銀を以、所々江被貸附、其利息を以、御勝手向不足被相補候様被成度旨、關東江御願被仰立候處、同年諸司代松平紀伊守より右御物成拂代銀御貸附之儀、於關東御願之通御聞濟有之候間、永ク圓門御相續之基立ニ可致旨申達、右依御由緒、其以來御物成拂代銀所々江被貸附置、其利息を以、專御勝手向之不足被相補、貸附金銀高之儀者、御留銀有之節者被貸附御入用之砌者被取立、尤利倍之沢茂有之、銀高年々不同有之、貸附金銀相滯候節、御役所江被仰立候儀、寛保三亥年、前書御由緒御届被成候、以來相滯候節ハ其段被仰立候、其後も滯多御難渋ニ付、寶曆十辰年關東江觸流之儀御願被仰立候處、寶曆十二午年御聞濟有之、京都・大坂・大津等觸流有之、且關東筋拝借之もの相滯候ハ、於寺社奉行所取立被進候儀、是又御願之通御聞濟有之候旨、右家来申之、

曇華院殿

御開山御祠堂銀、古来より有之、手廣ニ被貸附候儀ニハ無之、前々より出入、町家之内江被預置、右利息銀を以、御佛殿御修理并御法事等有之、安永五甲午御届被仰立、其節銀高三拾貫目當地町人江被預置、御名目を以外々江貸附候儀、決而致間敷旨、兼而堅被申付置、右御祠堂銀之儀、外方貸附銀と品も遣候得共、若差滯候節者、取立方御頼之儀被仰立、所司代土 大炊頭殿御勤役中

土大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里
明和六年、安永六年在職
(一七六九—一七七七)
有栖川宮 織仁親王
正徳四千年

正徳四甲午(一七一四年)
所司代松平紀伊守

京都所司代松平紀伊守信庸
元禄十五年、正徳四年在職
(一七〇一—一七一一)

寶曆十二午年

寶曆十二辛午(一七六二年)

故一品宮 有栖川宮職仁親王

桃園院 桃園天皇

延享四年即位 寶曆十二年崩御
(一七四七—一七六二在位)

明和二酉年

明和二乙酉(一七六五年)

寶曆十二午年

寶曆十二辛午(一七六二年)

去ル甲午

天明八戊申(一七八八年)

隨心院御門跡

寛政二年當時は門主不在

堯巖大僧正

天明九(一七八九年)化

增護大僧正

文政二(一八一九年)入室

天明二寅年

天明二壬寅(一七八二年)

〔四九七〕

〔四九八〕

御承知被成候旨、傳 奏衆より御達有之候處、此度御佛殿御造立御入用ニ付、右御預銀悉返納いたし、當時御預ケ銀無之旨、右御家来申之、

有栖川宮

正徳四午年御不勝手之頃、關東表被 開召、金千両被進候旨、同年所司代松平紀伊守より申達、右躰被進金之儀ニ付、末々迄も龜抹致間敷旨、申達候故、出入之町人共江貸附、利銀を以、御修理并御勝手向被賄有之候處、實曆年中貸附先之内返済不埒ニ付、實曆十二年御修理并臺所賄銀貸附有之候間、相滞候ハ、於御役所取立之儀被仰立候、且故一品宮、

桃園院、仙洞江和哥御師範有之候付、明和二酉年より同六丑年迄從關東為御賞米一ヶ年ニ現米百石宛被進、從

御所も金貳百両被進候付、右被進米金共、前書同様、向々江被貸付、利足を以、是又御修復且御勝手向等之賄銀ニ相成候旨、尤相滞候節取立之儀御役所江被仰立候由、實曆十二年 留書相見候得共、去ル甲午年貸附方帳面留書等焼失いたし候故、委敷訳難相知旨、右御家来申之、

随心院御門跡

貸附被相願候年月等留無之、難相分候得共、久々御無住ニ付、御知行米代銀年々少々宛領分有之候付、右溜銀を以被貸付置、毎年御修復入用之節者、右元利を以相用、猶又相殘候溜銀貸付候儀ニ而、最初より金銀高相極候儀ハ無之、尤相滞候節、取立之儀御役所江被仰立候處、天明二寅年貸付銀口々相改、所司代牧野備後守勤役中、願書傳 奏衆迄被差出候處、備後

〔五〇才〕

所司代牧野備後守

京都所司代牧野備後守貞道

寛保二年、寛延二年在職

(一七四二—一七四九)

照高院宮

忠善法親王(故人)

享保七(一七二二)年誕生

享保十八年聖護院入寺得度

天明八(一七八八)年薨

天明八年から門主不在のち廃絶

寶曆二年

宝曆二壬申(一七五二)年

安永七戌年

安永七戌戌(一七八八)年

所司代久 大和守殿

京都所司代久世大和守廣明

安永六年、天明元年在職

(一七七七—一七八二)

『柳宮補任』は出雲守とのみ

智恩院御門跡

尊峯法親王 桜町院養子

元文六年誕生 天明八年薨

(一七四一—一七八八)

龜代宮

寛政元(一七八九)年誕生

寛政四年知恩院門室相統

元文四未年

元文四己未(一七三九)年

所司代土 丹後守殿

京都所司代土岐丹後守頼稔

享保十九年、寛保二年在職

(一七三九—一七四二)

安永四未年

安永四乙未(一七五五)年

守承知有之、御役所江も通達有之、相滞候節者、取立御役所江被仰立候旨、右御家来申之、

照高院宮

寶曆^{〔中〕}二年為御修復料、從關東被進銀百貫目、其節御修復ニ被相用候余金銀年々被貸附利息を以、御修復用ニ被相用、安永七^{〔下〕}戌年貸付并滞取立之儀、如前々被成度、所司代久 大和守殿御勤役中被仰立候處、御聞届之旨、傳 奏衆より御達有之、相滞候節、取立之儀御役所江被仰立候由、尤金銀高極り無之旨、右御家来申之、

智恩院御門跡

御門室御貸附之儀者、御宗門為御修学、御代々御滞府被為在候御手當補ニ被成置、御参府御用意銀と被唱、尤御門室者關東御由緒有之候故、元文四未年所司代土 丹後守御勤役中、御差圖之上被立置、御勝手向差操余慶を以、右御手當補ニ相成候事ニ付、最初より銀高不相定段、安永四未年所司代土 大炊頭殿御勤役中ニも別段被御聞置、御貸附先々仕来之通、其時々ニ御届無之段被仰達、其段も被御聞置、御貸附金銀相滞候節ハ御役所江其時々ニ御取立被仰立候儀、前々より之仕来之旨、右御家来申之、

勸修寺御門跡

享保十八丑年

證明院様為御遺物、從關東被進候御祠堂銀貳百兩并御境内諸堂舎及御殿御修理金銀等被貸附、右利息を以、年々御法用御修理等之御入用ニ相成、尤御修理金者從前々被貸附候儀故、最初之年月、元高等難相分、相滞候節者取立之儀御役所江

〔五〇〇〕

所司代土 大炊頭殿

京都所司代土并大炊頭利里

明和六年ノ安永六年在職

(一七六九〜一七七七)

勸修寺御門跡 寛宝法親王

享和二(一八〇二)年薨

享保十八丑年

享保十八癸丑(一七三三)年

證明院様

伏見宮邦永親王姫宮

徳川家重正室

正徳元年誕生、享保十八年逝去

(一七一〜一七三三)

一乗院宮

尊映法親王 桃園院養子

寛延元年誕生、寛政五年薨

(一七四八〜一七九三)

去ル甲年

天明八戊申(一七八八)年

靈鑑寺宮

宗恭 孝宮、後桃園院養子

明和六年誕生、文政四年寂

(一七六九〜一八二二)

證明院様 比宮増子

伏見宮邦永親王姫宮

徳川家重正室

正徳元年誕生、享保十八年逝去

(一七一〜一七三三)

牧野河内守

京都所司代牧野河内守英成

享保九年ノ享保十九年在職

(一七二四〜一七三四)

被仰立候旨、右御家来申之、

一 乗院宮

御殿御修理銀被貸付金銀高相極候儀ハ無之、相滞候節者取立之儀御役所江被仰立候、右貸附留書等、去ル甲午御里坊御類焼之節紛失いたし、難相分候旨、右御家来申之、

靈鑑寺宮

享保十八丑年

證明院様御遺金貳百兩被進候旨、所司代牧野河内守申達、同十九寅年右御金御貸附被成度候、相滞候節者御役所江取立御願可被成儀被仰立、尤何程被貸附候旨申儀者、不被仰入候處、河内守承知有之、右之外年々從関東被進銀并禪智院殿御修復銀茂差加被貸附候旨、右御家来申之、

花山院家

右貸附之社金者、修理遷宮之節、東福門院様御寄附物、

靈元院、礼成門院、新上西門院様御寄附物、年々御初穂料、其外所々寄附物相集候而、修復為助力、前々被貸附、右利息を以、年々社修復有之、安永七戌年所司代久、大和守殿御勤役中、社金貸附等之由来御尋之節、書付被差出、滞有之節取立候儀御役所江御達置候旨、大和守殿御書付を以被仰達候旨、右家来申之、

〔五二才〕

廣幡家

家領江州野例郡南桜村野例川筋、川普請料銀貸附被置、若難渋之儀有之節者、御役所江可被申立候間、聞届

同十九寅年

享保十九甲寅（七三四年）

花山院家

正二位権大納言花山院愛徳東福門院様

後水尾天皇の中宮、源和子徳川秀忠女

寛永六天天皇讓位に伴い院号

慶長十二年生、延宝六年崩御

（一六〇七〜一六七八）

靈元院 靈元天皇

寛文三年（貞享四年在位）
（一六六三〜一六八七）

礼成門院

孝子内親王、後光明天皇皇女
享保十二（七二五年院号・薨）

新上西門院

靈元天皇中宮 藤原房子
鷹司前左大臣教平女

安永七戌年

安永七戌（二七七八）年
所司代久大和守殿

京都所司代久世大和守廣明
安永六年（天明元年在職）
（一七七七〜一七八一）

『柳営補任』は出雲守とのみ

廣幡家

正二位権大納言廣幡前秀
江州野洲郡南桜村

現在滋賀県野洲郡野洲町南桜

有之候様、寶曆十二年傳 奏衆江以書付被申立置候旨、
右家来申之、

千種家

延享五辰年、

至心院様御遺金被致拝領候式百兩、山城・大和・近江・丹波四ヶ

国江被貸附度旨、御役所江被申立、翌寛延二己年先役共、

承置、滞有之節者取立之儀御役所江被申立候、右貸附金

最初被申立候留書、去ル甲年焼失委細之儀不分明之

旨、右家来申之、

梅溪家

寛延三午年、

至心院様御遺金千兩被致拝領候節、出入町人江取次被

貸附、相滞候節者、取立申立可有之旨、届有之候得共、右届之

儀、何連江相届候哉、去ル甲年類焼之節、扣帳致焼失難

相分旨、右家来申之、

平松家

右小録、其上知行所之内水場茂有之、難渋ニ付、少々之納戸

金銀有之貸附置、足物ニ而勝手向取續有之、尤金銀高

増減有之、極り候者無之、尤被貸附候最初之儀者、年久敷

儀ニ而難相分、滞有之節取立之儀ハ御役所江被申立候旨、

右家来申之、

覚勝院

寛延三午年、

至心院様御遺金被致拝領、御位牌殿修復之助成、且御法

寶曆十二年

宝曆十二辛午（七六二）年

千種家

從二位參議千種有政延享五辰年

延享五戊辰（七四八）年

至心院様 於幸方

梅溪從二位前權中納言通柔女

徳川家重側室、徳川家治生母

延享五（七四八）年逝去

寛延二己年

寛延二己巳（七四九）年

去ル甲年

天明八戊申（七八八）年

梅溪家

從五位下梅溪行通

寛延三午年

寛延三庚午（七五〇）年

平松家

正三位平松時章

覚勝院

現在真言宗大覚寺派

京都市右京区嵯峨大覚寺門前登り町

事等、永無怠懈相勤度、安永四未年所司代土 大炊頭殿御勤役中、南都表ニ而貸附申度旨相願、御聞濟ニ而南都奉行江御通達被遣候旨被仰渡、尤金銀高極無之、安永八亥年所司代久大和守殿御勤役中、貸附相滞候付、取立之儀、南都奉行江御通達被成候様、相願候儀も有之、京都貸附之儀も先年御聞届有之、貸附候得共、最初より之詔書・日記等當地里坊ニ有之、去ル甲午年類焼之節、焼失いたし相分不申、尤當時京都ニ貸附無之旨、右家来申之、

東 竹

宝曆年中、東竹相續之砌、從関東拜領金千兩貸附置、相滞候ハ、取立申付候様致度申立有之候得共、帳面焼失いたし、委敷儀共難相知、尤當時貸附者無之旨、右家来申之、

智恩寺

御祠堂金貸附、最初者年久敷儀ニ而難相知候得共、滞有之節、取立之儀御役所江願出候旨、右役者申之、

泉涌寺

先帝御代々、門院方、為御日供御膳料、御廟所御燈明料、毎月御忌日、御正忌御法事料、

禁裏、院中、門跡方、從往古御寄附金五千七拾毫兩余、御祠堂金与称之、京都・大坂ニ而貸附度旨、宝曆八寅年於関東相願、寺社奉行所ニ而願之通被申渡、則其節觸流有之、右貸付相滞候得者、其支配奉行所江取立相願候様、是又被申渡、相滞候得者、取立之儀、御役所江願出候旨、右役者申之、

〔五三ウ〕

安永四未年

安永四乙未(一七七五年)

所司代土 大炊頭殿

京都所司代土井大炊頭利里

明和六年(一七六九年)安永六年在職

(一七六九)一七七七

南都奉行

奈良奉行 南都町奉行ともいう

安永八亥年

安永八己亥(一七七八)年

所司代久 大和守殿

京都所司代久世大和守廣明

安永六年(一七七七)天明元年在職

(一七七七)一七八一

『柳營補任』は出雲守とのみ

去ル甲午 京都大火

天明八戊申(一七八八年)

東竹 未詳

宝曆年中 一七五一(一七六四年)

智恩寺 浄土宗四本山の

京都市左京区田中門前町

泉涌寺 真言宗

京都市東山区泉涌寺山内町

宝曆八寅年

宝曆八戊寅(一七八八年)

寺社奉行所 宝曆八年

寺社奉行青山因幡守忠朝

寛延元年(一七四八)宝曆八年在職

(一七四八)一七五八

寺社奉行本多長門守忠英

寛延二年(一七四九)宝曆八年在職

(一七四九)一七五八

〔五四オ〕

相国寺塔頭

心華院

伏見宮御菩提所ニ而御代々御位牌有之、其上

證明院様奉安置、御回向等無懈怠相勤候、右御牌殿為御修復料被附置、御祠堂金銀并年々御備之御香奠相

加貸附、右利息を以、御牌殿并修復助成致度旨、宝曆六

子年御役所江願出、翌丑年先役共承届、尤貸附金

銀高相極候儀無之、滞有之節者取立之儀御役所江願出

候之旨、右心華院申之、

但、證明院様御祠堂金銀之儀者、御遺命を以、從伏見宮

被附置、從

公儀御寄附与申ニ者無之由、

般舟院

先帝御代々御膳御供養料、御祠堂貸附いたし、尤何

之頃相願候哉、享保年中類焼之節、書留等焼失いたし、

不相分候得共、前々より貸附仕来候、宝永七寅年

東山院御牌前江、從関東、御額御染筆為御礼、御備之

白銀三百枚、右為御祠堂貸附、

先帝御代々御膳御供養料、從

御所被為附候金三百両、銀式拾四貫八拾目、當時之高ニ御座候、

尤御膳御供養料之儀ニ候得者、時々相増候旨、右役者申之、

長香寺

享保十一年年

淨圓院様兼而 思召之趣を以被下置候金五百両并御留守

〔五四ウ〕

證明院様 比宮増子

伏見宮邦永親王姫宮

徳川家重正室(御台所)

正徳元年誕生、享保十八年逝去

(一七一〇—一七三三)

宝曆六子年

宝曆六丙子(一七五六)年

翌丑年 宝曆七丁丑(一七五七)年

般舟院 天台宗

京都市上京区今出川通千本東入

般舟院前町

宝永七寅年

宝永七庚寅(一七〇〇)年

東山院 東山天皇

貞享四年(一六八七)宝永六年在位

(一六八七—一七〇九)

長香寺 淨土宗

京都市下京区高倉通り松原下る

樋之下町

〔五五オ〕

居中且信了院より之書状差添相渡、信了院より申
 参候趣大切ニ執行可致旨、先役小濱志摩守申渡、其節
 住職立替拝領いたし、其後いつ頃相願貸附いたし
 候哉、延享三寅年滞有之、取立之儀、初而出訴候旨、右
 長香寺申之、

閑院宮

心観院様御遺金之内高七百両被貸附候間、万一相滞候節
 者、御役所取立之儀被仰立度旨、安永八亥年十月所
 司代久 大和守殿御勤役中被仰立、御聞届有之候处、右
 高之上江

心観院様御在世中被進金茂差加被貸附度段、翌子年
 書付被差出、右御同人御聞届有之候旨、右御家来申之、

梶井宮

御臺所不勝手ニ付、追而御灌頂御催之節差支可申ニ付、年々
 被除置、右手當銀ニ被貸附候間、万一返済相滞候節者、於御
 役所取立有之候様、宝曆十三未年所司代阿伊豫守殿御勤
 役中被仰立、最初より元高極無之旨、右御家来申之、

京極殿

御納戸金貸附之儀、元高極無之、宝曆年中被仰立候得
 共、其節之書留、去々甲午焼失ニ付、年月委細之儀者
 相知不申、江州一ヶ国之外貸附無之旨、右御家来
 申之、

仁和寺宮

〔五五ウ〕

享保十一年午

享保十一丙午（七二〇年）

浄園院様 於由利之方

徳川光貞側室、徳川吉宗生母

享保十一（七二〇年）逝去

小濱志摩守

京都東町奉行小濱志摩守久隆

享保九年（享保十二年）

延享三寅年

延享三丙寅（七四〇年）

閑院宮 典仁親王

心観院様 徳川家治御台所

安永八亥年

安永八己亥（七七九）年

所司代久 大和守殿

京都所司代久世大和守廣明

安永六年（天明元年）在職

『柳営補任』は出雲守とのみ

翌子年 安永九庚子（七八〇）年

梶井宮

寛政二年當時は門主不在

常仁法親王

明和九（七七二）年寂

承真法親王

享和三（一八〇三）年入寺

宝曆十三未年

宝曆十三癸未（七六三年）

宝曆元年末、御影堂御造宮為御元立

關東より被進金貳百兩并諸国末下寺院之内より奉納

佛具經卷之類修復等ニ被相用候手當ニ被差加候祠堂

銀ニ付、手沙汰ニ而取斗候得共、寛政元酉年七月

改而被仰立候付、安永四未年以來貸附被置候分

返濟相滯候節者、御役所江可被申立旨、所司代太

備中守殿被仰渡候、右ニ付元高増減極無之旨、御家

来申之、

実相院御門跡

御修復料銀被貸附、返濟相滯候節者、於御役所取立

有之候様、明和六丑年被申立候儀者、無相違候得共、其

節之留書、致混雜難相知旨、右御家来申之、

妙法院宮

御寺門等及破損候得共、御勝手向不如意ニ付、御修理等

難相調ニ付、御境内江地子先納被仰付、右銀子境内

向寄江被貸附、右利足を以、修復被相加度旨、宝曆

四戊年七月傳 奏衆江被相達、返濟相滯候節者、

於御役所取立有之候様、其節御役所江も被仰立置

候由、尤所司代江御達可有之候得共、難相分旨、右御家

来申之、

三条西家

納戸金銀被貸附候得共、滯茂無之候处、近来相滯

候間、於御役所取立有之候様、天明七未年十月戸田因

幡守勤役中被申立、元高極無之旨、右家来申之、

〔五六才〕

所司代阿 伊豫守殿

京都所司代阿部伊豫守正右

宝曆十年、宝曆十四年在職

(一七六〇—一七六四)

京極殿 京極宮公仁親王

宝曆年中 一七五一—一七六四年

去々甲年

天明八戊申(一七八八)年

仁和寺宮

深仁法親王

明和五(一七六八)年入室

文化四(一八〇七)年寂

宝曆元未年

宝曆元辛未(一七五二)年

寛政元酉年

寛政元己酉(一七八九)年

安永四未年

安永四乙未(一七七五年)

所司代太 備中守殿

京都所司代太田備中守資愛

寛政元年、寛政四年在職

(一七八九—一七九二年)

実相院御門跡

寛政二年當時は門主不在

健宮 閑院典仁親王末子

安永七(一七七八)年相統

安永九(一七八〇)年薨

義海 近衛右大臣經熙息

寛政八(一七九六)年相統

享和元(一八〇一)年入室

明和六丑年 明和六己丑(一七六九年)

〔五六ウ〕

梅園家

前長橘故小宰相典侍局在勤中之拝領金、為法事料
貸附置、相滞候節者、於御役所取立有之候様、宝曆七寅
年被申立、元高極無之處、當時右貸附相止候間、
此以後被貸附候節者、可被相届旨、右家来申之、

〔五七才〕

姉小路家

先代傳 奏役ニ而、年々参府之節、
御所・御臺所より銀五貫目宛拝借、帰京之上銀貳貫
目ツ、上納、殘銀三貫目宛者、年々不納ニ相成、高三拾六貫
目ニ相成、其砌

御所向御取締ニ付、右拝領滞之分、年々ニ相納候様被
仰渡候得共、勝手向不手廻ニ付、難相納段被申立候处、不限
多少被相納候様与之儀ニ付、右拝借銀返納方為助成、
貸附之儀被相願候处、天明三卯年四月所司代牧野備後
守勤役中承届候付、年々少々宛返納いたし候旨、
尤右貸附先滞候節者、於御役所取立之儀被申立、元
高極無之旨、右家来申之、

〔五七乙〕

醍醐家

一条前関白殿より被讓請候西賀茂川上村下屋鋪修
復料銀、先年被相届、貸附被置候处、天明三卯年
所司代牧野備後守勤役中、此以後、仕来之通、貸附相
滞候節者、於御役所取立有之候様、猶又被申立、元高
極無之旨、右家来申之、

勸修寺家

妙法院宮

真仁法親王 桃園天皇養子

明和五二七六〇年号誕生

明和六年相統妙法院

安永七二七七〇年養子、親王宣下、

入寺得度 文化二二八〇五年薨

宝曆四戌年 宝曆四甲戌二七五四)年

三条西家

正二位前大納言三条西実称

從二位權中納言三条西廷率

天明七未二七八七年

戸田因幡守

京都所司代戸田因幡守忠寛

天明四年、天明七年在職

(七八四一七八七)

梅園家

從二位前参議梅園実繩

宝曆七寅年

宝曆七丁丑二七五七年?

宝曆八戌寅二七五八年?

姉小路家

正三位權中納言姉小路公聰

先代

正二位前權大納言姉小路公文

宝曆十年、安永三年武家伝奏

(七六〇一七七四)

天明三卯年

天明三癸卯二七八三年

所司代牧野備後守

京都所司代牧野備後守貞道

寛保二年、寛延二年在職

(一七四二一七四九)

納戸銀被貸附候間、相滞候節者、於御役所取立有之候様、
宝曆十辰年被申立候儀者、無相違候得共、委細之儀者
難相分、其後取立之儀被申立候儀無之、尤元高之
儀極無之旨、右家来申之、

佛光寺門跡

從

東福門院様 深信解院宮、右門跡江御寄附御法事
料并一山之祠堂銀等貸附置、右利足を以、堂舎
修復并讀經法事等相賄候儀ニ付、返済相滞候節
ハ取立有之候様、宝曆八寅年七月御役所江被申立、
銀高極無之旨、右家来申之、

大佛

常住金剛院

先年從

關東被 仰付、於山門横川御精進代相勤候節之御祈
禱料貸附度旨、申立候儀有之候得共、年久鋪以前
之儀ニ而、委細之儀難相知、當時貸附金銀一切無之
旨、右家来申之、

大佛

養源院

寺領水所ニ而年貢不納之節者、拝借相願、取續候得共、水
損毎度拝借相願候も恐入、寺領相應ニ收納有
之節ハ勘弁いたし、御供料賄等之為手當收納
之節、少々宛町人共江貸附、助力ニいたし候処、當

〔五八才〕

醍醐家

正二位權大納言醍醐輝久

一条前關白殿

前關白左大臣一条道香

宝曆七(一二五七)年辞關白

明和六(一七六九)年薨

天明三卯年

天明三癸卯(一七八三)年

所司代牧野備後守

京都所司代牧野備後守貞道

寛保二年(一七四二)寛延二年(一七四九)在職

(一七四二—一七四九)年

勸修寺家

正二位權大納言勸修寺經逸

宝曆十辰年

宝曆十庚辰(一七六〇)年

佛光寺門跡 隨扈上人真乘

東福門院様

後水尾天皇の中宮、徳川和子

寛永六年天皇讓位に伴い院号

慶長十二年生、延宝六年崩御

(一六〇七—一六七八)年

深信解院宮 賀子内親王

後水尾天皇の女五宮

母東福門院源和子

二条光平室 深信解脱院宮

寛永九年生、元禄九年薨

(一六三二—一六九六)年

宝曆八寅年

宝曆八戌寅(一七五八)年

〔五八才〕

養源院代ニ至り候而者、寺領打續水損ニ而年々

不納之上、諸建物及大破、修復難及自力候付、拝借

相願候処、安永七戌年銀百枚被下置候得共、修復用ニハ

行届不申、数ヶ所之破損所ニ付、差懸り難捨置場

所取繕いたし、残銀并勸化物等除置、少々宛も貸付

置候儀ニ付、銀高極無之、右貸附相滞候節者取立之

儀、明和六丑年六月より御役所江申立候由、右役者申之、

東山

光雲寺

東福門院為御供養料被下置候御祠堂金千両并延

享三寅年於大坂勸化寄金百五拾両差加、貸附度

段、宝曆三酉年二月於寺社奉行所、願之通相濟候ニ

付、右貸附相滞候節ハ、於御役所取立之儀、相願候旨、右役

者申之、

西賀茂

靈源寺

後水尾院勅願所ニ而年々從

御所御祈禱料等被下

東福門院様

文照院様 御祠堂金等都合五千百三拾両有之外ニ助成も

無之ニ付、右金京大坂在町江貸附置、此助力を以、日々

無懈怠御祈禱・修行・寺修復之手當ニ仕度候ニ付、若

相滞候而者、迷惑いたし候間、借請候者者元利極

之通返済有之候様觸流之儀、并右貸附方万一相滞候節

常住金剛院

養源院 浄土真宗

京都市東山区大和大路通七条下る

三十三間堂廻り町

安永七戌年

安永七戌戌（七七八）年

明和六丑年

明和六己丑（七六九年）

光雲寺 臨濟宗

京都市左京区南禪寺北ノ坊町

東福門院

後水尾天皇の中宮、徳川和子

寛永六年天皇讓位に伴い院号

慶長十二年生、延宝六年崩御

（一六〇七）一六七八

延享三寅年

延享三丙寅（七四六年）

宝曆三酉年

宝曆三癸酉（七五三年）

寺社奉行所 宝曆三年二月

寺社奉行青山因幡守忠朝

寛延元年（宝曆八年）在職

（一七四八）一七五八

寺社奉行本多長門守忠英

寛延二年（宝曆十年）在職

（一七四九）一七五八

寺社奉行鳥居伊賀守忠孝

宝曆二年（宝曆十年）在職

（一七五二）一七六〇

靈源寺

京都市北区西賀茂北今原町

〔五九ウ〕

〔五九オ〕

者於於御役所取立有之候様、宝曆十一巳年十一月於寺社奉行所、願之通相濟候旨、右役者申之、

梅溪家菩提所

大徳寺中

昌林院

至心院様御位牌被相納置候ニ付、永々御菩提為御供料、御内々從

關東、梅溪家江金百兩被致拝領候付、右寺寄附不

致消亡様被貸附、相滞候節者、取立之儀御役所江可

申立旨、明和五子年梅溪家より所司代阿豊後守殿江

被申上候処、右百兩之外貸附無之様被仰渡候旨、右

役者申之、

高臺寺

後西院為御菩提、曇華院宮より御祠堂金貳百〇〇

高臺院御香奠銀御遺金等、合百貫目余貸附置、利

足を以、堂舎修復いたし、御菩提勤行仕度ニ付、若相滞

候ハ、於御役所取立之儀、宝曆八寅年願出承届

候段、右役者申之、

幡枝村

圓福寺

從

御所御代々被下置候御祠堂金銀、末々疎略ニ不相成

樣いたし度、貸附、右利足を以、永々無滞御供養

仕度ニ付、返済相滞候節者、於御役所取立之儀、

後水尾院 後水尾天皇

慶長十六年〜寛永六年在位
(一六二〇〜一六二九)

東福門院様

後水尾天皇の中宮、徳川和子
寛永六年天皇讓位に伴い院号

慶長十二年生、延宝六年崩御
(一六〇七〜一六七八)

宝曆十一巳年

宝曆十一辛巳(一七六二)年

至心院様 於幸之方

梅溪從二位前権中納言通条女
徳川家重側室、徳川家治生母

延享五(一七四八)年逝去

明和五子年

明和五戊子(一七六八)年

梅溪家

從五位下梅溪行通
所司代阿 豊後守殿

京都所司代阿部伊豫守正右?
(金暦十年、宝暦十四年)

京都所司代阿部飛騨守正允?
(明和元年、明和六年)

京都所司代松平豊後守資訓?
(寛延二年、宝暦二年)

高臺寺 臨濟宗

京都市東山区下河原通八坂鳥居前
下る下河原町

後西院 後西天皇

承応三年〜寛文三年在位
(一六五四〜一六六三年)

宝曆九卯年相願承届候旨、尤元高極り候儀無之
旨、右役者申之、
右之通御座候以上、
戊^原十二月

解題

本書は、『祠部職掌雜纂』の一冊として、たまたま青山文庫にのみ遺っている記録である。

本書は、まだ類書を搜索していないので、いかなる位置づけをすべきか、迷う所である。したがって、とりあえず本書の記事から読み取れることのみ、紹介する。

本書の体裁は、縦二七・五センチメートル、横一九・八センチメートルで、本紙は六一丁からなり、表紙は他と同じく右端を四目綴している。題簽の上半部に「祠部職掌雜纂」、下半部に双行で「宮門跡方／貸附金一件」と標題を記す。第一丁の冒頭部右上肩部に朱印「篠山文庫」を捺す。朱書は冒頭の一行と四六丁表の双行の表題のみである。虫損は他本にくらべれば無難な方といえようか。

〔六〇乙〕

〔六一乙〕

高臺院 浅野寧子

豊臣秀吉夫人・北政所

天正十六年従一位豊臣吉子

慶長三年秀吉の死で落飾

慶長十年高台寺を建立

天文十八年生、寛永元年没

(一五四九～一六二四年)

宝曆八寅年

宝曆八戌寅(一七五八)年

宝曆九卯年

宝曆九己卯(一七五九)年

戊十二月 寛政二庚戌(一七九〇)年

冒頭に朱書で「菅沼下野殿より借写」とあり、つづいて墨書で記されているように、前半分は「宮門跡方・堂上方、其外寺院等貸付金銀起立之儀、向々より差出候書付」、後半分は「村垣左太夫江達候訳書帳」の写である。

内容は、寺社奉行固有の職務に限られるのではなく、寺院門跡に限らず、一部に公家衆の関する記事も見られる。これまで翻刻してきた一連の京都関係の、宮家・諸門跡・堂上(公家)・諸寺院に関する資料の最後にあたる。前半は、天明八戊申(一七八八)年の京都大火による記録焼失を前提として、寛政二庚戌(一七九〇)年四月に書類提出を求めたものである。各宮門跡方・堂上(公家)方・寺院などから武家伝奏を介して、返済滞納分の貸付金銀取立を念頭において、京都町奉行所へ提出された願書をまとめたもので、さらに同年十二月十五日付で京都東西町奉行井上美濃守・菅沼下野守より勘定奉行配下の

勘定吟味役・京都御用掛である村垣左大夫に伝達したものである。幕府が京都所在の宮門跡以下に特別な由緒や事情を認めた場合に東西町奉行所が貸金債権の代理徴収を行い特別な貸主を保護している。とりわけ内容的にはかわりの深い寺社奉行としての大河内松平輝和（天明四年四月）寛政十年十二月在任の関心を引いたのであろう。そしてその写しがこの『祠部職掌雜纂』にも収められた。

寛政二年四月に出された問合せの内容は、たとえば

（イ）御貸附三相成候金銀、何金三候哉、（貸付元金の種類・性格）

（ロ）金銀之高相極有之候哉、（貸付金額の定額の有無）

（ハ）右御貸附金銀相滞候節、御役所江被仰立候最初之訳、

（東西奉行所への取立要請経緯）

（ニ）当時御貸附先々（当該時点での貸付先一覧）

（ホ）滞口等御役所江被仰立候口々名前之事（滞納者必要督促徴収対象者名）

などである。

なお各口上書にともなう貸付金銀高名前帳は冊数のみが記録され、詳細は省略されている。京都にとどめられ、そのまま執務用記録として利用されたのであろう。

本書の前半部に名に見えるのは、1 仙洞御所泰宮御方、2 青蓮院宮、3 三寶院門主、4 円満院門跡、5 疊華院殿、6 有栖川宮、7 随心院門跡、8 知恩院門跡、9 勸修寺門跡、10 一乗院宮、11 靈鑑寺宮、12 花山院大納言、13 千種宰相中将、14 梅溪孝丸、15 平松三位、16

寛勝院大僧正、17 東竹、18（知恩院）大忍寺、19 泉涌寺、20（伏見宮菩提心華院、21 般舟院、22 中院前大納言、23 寺門三井寺）、24 金地院、25 九条殿、26 聖護院宮、27 広幡大納言、28 伏見殿、29 二条殿、30 一条殿、31 長香殿までが、東町奉行所での取扱い分である。これらと別に、西町奉行所の取扱い分、閑院宮より円通寺までの分がある。

京都の東西町奉行所が、天明八申（一七八八）年に役所に保管していた帳面を焼失したため、あらためて寛政二戊（一七九〇）年四月晦日に各宮門跡方・堂上方・寺院からさまざまな名目で貸し付けている具体的状況の再調査を行ったもので、両者の取調結果をまとめて合帳の形にしたものが、四六丁表から始まる記録である。ここでは各家来から事情聴取した結果をまとめていく。

内訳は1 一条殿、2 二条殿、3 近衛泰宮御方、4 九条殿、5 青蓮院宮、6 伏見宮、7 聖護院宮、8 三寶院門跡、9 円満院門跡、10 疊華院殿、11 有栖川宮、12 随心院門跡、13 照高院宮、14 智恩院門跡、15 勸修寺門跡、16 一乗院宮、17 靈鑑寺宮、18 花山院家、19 広幡家、20 千種家、21 梅溪家、22 平松家、23 寛勝院、24 東竹、25 智恩寺、26 泉涌寺、27（相国寺塔頭）心華院、28 般舟院、29 長香寺までが東町奉行取調べ分である。以下が西町奉行所の取調べ分である。30 閑院宮、31 梶井宮、32 京極殿、33 仁和寺宮、34 実相院門跡、35 妙法院宮、36 三条西家、37 梅園家、38 姉小路家、39 醍醐家、40 勸修寺家、41 仏光寺門跡、42 常住金剛院、43（大仏）養源院、44 東山、光雲寺、45（西賀茂）靈源寺、46（梅溪家菩提所、大徳寺）昌林院、47 高台寺、48（幡枝村）円福寺で

ある。東西奉行所の日頃の管轄分担がここに現れているのであろうか。管轄基準は不詳である。東西奉行所の月番制との直接的関係の有無も不明である。

ちなみに寛政二年当時の京都所司代は、若年寄から就任した太田備中守資愛(寛政元年四月〜寛政四年四月在任、遠江掛川五万余石)である。京都町奉行は、いずれも目付から就任した西町奉行井上美濃守利恭(天明八年九月〜寛政三年十二月在任、五〇〇石、東町奉行菅沼下野守定喜(寛政元年九月〜寛政九年十月在任、一二二〇余石)であった。後者が本書の原本の所有者であったことは、いうまでもない。菅沼は京都町奉行を終えたあと、勘定奉行に就任しており(公事方、寛政九年十月〜享和二年五月免職、差控)、本書原本の借出は、この在任中であらうか。寛政十年十二月に松平輝和は大坂城代に就任するので、その時期は寛政九年末から寛政十年中といえようか。

後半の文中から、先に指摘した(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)の各内容を示しておく。

1 一條殿

(イ) 領内百姓共先納付銀并数年立入之町人共仕送銀等、安永三年より十五ヶ年之間銀子御借請、

餘銀之分十五ヶ年之間年々被貸附、御納戸銀与唱、

(ロ) 銀高極無之、

(ハ) 万一遲滞之節ハ取立之儀可被仰立段、所司代土井大炊頭殿御勤役中御通達之儀、且右御貸附中取斗之儀御頼

被成度、御役所江御通達之儀共、安永五申年傳奏衆江書付被差出、

相滞候節者取立之儀御役所江被仰立候、

2 二條殿

(イ) 御普請金・御納戸金之内

天明三卯年金高式千兩餘貸附之儀御頼有之、関東御間濟有之候間、金高式千兩を限り當地在町江被貸附、

(ロ) 相滞候節取立之儀御役所江被仰立候旨、所司代牧野備後守勤役中相達候、

3 近衛泰宮御方

(イ) 元金銀者近衛殿より御貸渡被進、

(ロ) 金銀高極無之被貸附、

(ハ) 安永十丑年所司代久世大和守殿御勤役中被仰立、関東御間濟有之、相滞候節取立之儀御役所江被仰立候、

4 九條殿

(イ) 納戸金

(ロ) 金高者極り無之、天明三卯年以来金高式千兩二限り、被貸附、

(ハ) 相滞候節取立之儀御役所江被仰立候、

5 青蓮院宮

(イ) 御祠堂御修復金銀

(ロ) 相滞候節者取立之儀被仰立度段、元文年中所司代江御通達之儀、傳奏衆江書付を以被仰入、其後明和元申年上々様方御遺金并於京都大坂持寄講被相催候掛ケ銀等

被貸附、相滯候節、其所々之奉行所ニ而取立之儀、江戸

表江被仰立候處、御聞濟有之、

(ロ) 金銀高極無之、

6 伏見宮

(イ) 關東より被進金、御遺金、納戸金、御修理金、御拂米代

銀、為御替銀等、

(ロ) 金銀高相極候儀無之、

(ハ) 去ル申年書物等致焼失、最初之訳難相分候得共、

相滯候節取立之儀御役所江被仰立候儀者、

天明五巳年所司代戸田因幡守在勤中被仰立候、

7 聖護院宮

(イ) 御隠居所照高院殿御寺領御無住中之御物成五ヶ年分、

御借銀等之濟方ニ相用、其余、

其外御祠堂金・御遺金等御殿御修復銀と号被貸附候、

(ロ) 右金銀高極り無之、

(ハ) 右御修復銀貸附返済相滯候節、取立之儀被仰立度、

安永六酉年所司代久大和守殿御勤役中被仰立、御聞届

ニ而相滯候節者、於御役所取立有之旨、御達有之、

8 寶院御門跡

(イ) 納戸銀

(ロ) 銀高増減有之、

(ハ) 貸附之儀前々之通被成度旨、天明元丑年傳奏衆江書付

を以被仰立、久大和守殿御勤役中被御聞置、相滯候節者

御役所江被仰立候、

9 圓満院御門跡

(イ) 毎年之御物成拂代銀

(ロ) 銀高年々不同有之、

(ハ) 貸附金銀相滯候節、御役所江被仰立候儀、寛保三亥年

前書御由緒御届被成候、以來相滯候節ハ其段被仰立候、

其後も滯多御難渋ニ付、寶曆十辰年關東江觸流之儀御

願被仰立候處、寶曆十二年御聞濟有之、京都・大坂・

大津等觸流有之、且關東筋拝借之もの相滯候ハ、於寺

社奉行所取立被進候儀、是又御願之通御聞濟有之候、

10 曇華院殿

(イ) 御開山御祠堂銀、

安永五甲午御届被仰立、銀高三拾貫目當地町人江

被預置、

(ロ) 右御祠堂銀之儀、外方貸附銀と品も遣候得共、若差滯

候節者、取立方御頼之儀被仰立、所司代土大炊頭殿御

勤役中、御承知被成候旨、傳奏衆より御達有之候、

(三) 此度御佛殿御造立御入用ニ付、右御預銀悉返納い

たし、當時御預ヶ銀無之、

11 有栖川宮

(イ) 正徳四午年御不勝手之頃、關東表被聞召金千兩被進候、

故一品宮、桃園院・仙洞江和哥御師範有之候付、明和二

酉年より同六丑年迄從關東為御賞米一ヶ年ニ現米百石

宛被進、從御所も金貳百兩被進候

(ハ) 寶曆年中貸附先之内返済不埒ニ付、寶曆十二年御修

理并臺所賄銀貸附有之候間、相滯候ハ、於御役所取立之儀被仰立候、

相滯候節取立之儀御役所江被仰立候由、寶曆十二年

留書相見候得共、去ル申年貸附方帳面留書等焼失いた

し候故、委敷訖難相知、

12 随心院御門跡

(イ) 知行米代銀年々少々宛溜銀

(ロ) 最初より金銀高相極候儀ハ無之、

(ハ) 相滯候節、取立之儀御役所江被仰立候處、天明二寅年

貸付銀口々相改、所司代牧野備後守勤役中、願書傳奏

衆迄被差出候處、備後守承知有之、御役所江も通達

有之、相滯候節者、取立御役所江被仰立候、

13 照高院宮

(イ) 寶曆二申年為御修復料、從關東被進銀百貫目、其節御

修復ニ被相用候余金銀、

(ロ) 金銀高極り無之、

(ハ) 安永七戌年貸付并滯取立之儀、如前々被成度、所司代

久大和守殿御勤役中被仰立候處、御聞届之旨、傳奏衆

より御達有之、相滯候節、取立之儀御役所江被仰立

候由、来申之、

14 智恩院御門跡

(イ) 御参府御用意銀、

(ロ) 最初より銀高不相定、

(ハ) 御貸附金銀相滯候節ハ御役所江其時々ニ御取立被仰立

候、前々より之仕来、

15 勸修寺御門跡

(イ) 享保十八丑年證明院様為御遺物、從關東被進候御御祠

堂銀式百両

并御境内諸堂舎及御殿御修理金銀

(ロ) 最初之年月、元高等難相分、

(ハ) 相滯候節者取立之儀御役所江被仰立候、

16 一乘院宮

(イ) 御殿御修理銀

(ロ) 被貸付金銀高相極候儀ハ無之、

(ハ) 相滯候節者取立之儀御役所江被仰立候、

右貸附留書等、去ル申年御里坊御類焼之節紛失いたし、

難相分候、

17 靈鑑寺宮

(イ) 享保十八丑年證明院様御遺金式百両、

右之外年々從關東被進銀并禪智院殿御修復銀茂差加、

(ロ) 同十九寅年右御金御貸附被成度候、相滯候節者御役所

江取立御願可被成儀被仰立、尤何程被貸附候旨申儀者、

不被仰入候處、河内守承知有之、被貸附候、

18 花山院家

(イ) 修理遷宮之節、東福門院様御寄附物、

靈元院・礼成門院・新上西門院様御寄附物、年々御初

穗料、其外所々寄附物

(ハ) 安永七戌年所司代久大和守殿御勤役中、社金貸附等之

19 廣幡家

由來御尋之節、書付被差出、滯有之節取立之儀御役所江御達置候旨、大和守殿御書付を以被仰達候、

(イ) 家領江州野州郡南桜村野州川筋川普請料銀

(ロ) 若難渋之儀有之節者、御役所江可被申立候間、聞届有之候様、寶曆十二年傳奏衆江以書付被申立置候、

20 千種家

(イ) 延享五辰年、至心院様御遺金貳百兩、

(ロ) 翌寛延二巳年、滯有之節者取立之儀御役所江被申立候、右貸附金最初被申立候留書、去ル申年焼失委細之儀不分明、

21 梅溪家

(イ) 寛延三年、至心院様御遺金千兩被致拝領候、

(ロ) 相滯候節者、取立申立可有之旨、届有之候得共、右届之儀、何連江相届候哉、去ル申年類焼之節、扣帳致焼失難相分、

22 平松家

(イ) 少々之納戸金銀

(ロ) 金銀高増減有之、極り候者無之、
(ハ) 尤被貸附候最初之儀者、年久敷儀ニ而難相分、滯有之節取立之儀ハ御役所江被申立候、

23 寛勝院

(イ) 寛延三年、至心院様御遺金被致拝領、

(ロ) 金銀高極無之、

(ハ) 安永八亥年所司代久大和守殿御勤役中、貸附相滯候付、取立之儀、南都奉行江御通達ヒ成候様、相願候儀も有

之、京都貸附之儀も先年御聞届有之、貸附候得共、最初

より之訳書・日記等當地里坊ニ有之、去ル申年類焼之節、焼失いたし相分不申、

(三) 當時京都ニ貸附無之、

24 東竹

(イ) 宝曆年中、東竹相續之砌、從関東拝領金千兩貸附置、

(ロ) 相滯候ハ、取立申付候様致度申立有之候得共、帳面焼失いたし委敷儀共難相知、

(ホ) 當時貸附者無之、

25 智恩寺

(イ) 御祠堂金、

(ロ) 滯有之節、取立之儀御役所江願出候、

26 泉涌寺

(イ) 先帝御代々、門院方為御日供御膳料、御廟所御燈明料、毎月御忌日、御正忌御法事料、

禁裏、院中、門跡方、從往古御寄附金五千七拾壹兩余、

(ロ) 御祠堂金与称之、京都・大坂ニ而貸附度旨、

宝曆八寅年於関東相願、寺社奉行ニ而願之通被申渡、則其節觸流有之、右貸付相滯候得者、其支配奉行所江取立相願候様、是又被申渡、

相滯候得者、取立之儀、御役所江願出候、

27 心華院

(イ) 御牌殿為御修復料、御祠堂金銀

并年々御備之御香奠相加、

(ロ) 貸附金銀高相極候儀無之、

(ハ) 貸附 宝曆六子年御役所江願出、翌丑年先役共承届、
滞有之節者取立之儀御役所江願出候、

28 般舟院

(イ) 先帝御代々御膳御供養料、

宝永七寅年東山院御牌前江、從閑東、御額御染筆為御
礼、御備之白銀三百枚、

先帝御代々御膳御供養料、從御所被為附候金三百兩、

銀式拾四貫八拾目、當時之高二御座候、尤御膳御供養料
之儀ニ候得者、時々相増候、

29 長香寺

(イ) 享保十一年年淨圓院様被下置候金五百兩

(ハ) 延享三寅年滞有之、取立之儀、初而出訴候、

ここまでが東町奉行取調べ分である。以下が西町奉行所の
取調べ分である。

30 閑院宮

(イ) 心観院様御遺金之内高七百兩、

右高之上江心観院様御在世中被進金茂差加

(ハ) 万一相滞候節者、御役所取立之儀被仰立度旨、

安永八亥年十月所司代久大和守殿御勤役中被仰立、

御聞届有之候、

31 梶井宮

(イ) 年々被除置、右手當銀

(ロ) 最初より元高極無之旨、

(ハ) 万一返済相滞候節者、於御役所取立有之候様、
宝曆十三末年所司代阿伊豫守殿御勤役中被仰立、

32 京極殿

(ロ) 御納戸金貸附之儀、元高極無之、

(ハ) 宝曆年中被仰立候得共、其節之書留、去々申年焼失ニ
付、年月委細之儀者相知不申、

(ニ) 江州一ヶ国之外貸附無之、

33 仁和寺宮

(イ) 宝曆元末年御影堂御造宮為御元立、閑東より被進

金貳百兩、

并諸国末下寺院之内より奉納佛具經卷之類修復等ニ被
相用候手當ニ被差加候祠堂銀

(ロ) 元高増減極無之、

(ハ) 寛政元酉年七月改而被仰立候付、安永四未年以來貸附
被置候分返済相滞候節者、御役所江可被申立旨、所司代

太備中守殿被仰渡候、

34 実相院門跡

(イ) 御修復料銀

(ハ) 返済相滞候節者、於御役所取立有之候様、明和六丑年
被申立候儀者無相違候得共、其節之留書致混雜難相知、

35 妙法院宮

- (イ) 御境内江地子先納被仰付、
- (ロ) 右銀子境内向寄江被貸附、右利足を以、修復被相加度旨、宝曆四戌年七月傳 奏衆江被相達、返済相滞候節者、於御役所取立有之候様、其節御役所江も被仰立置候由、尤所司代江御達可有之候得共、難相分、

36 三条西家

- (イ) 納戸金銀
- (ロ) 元高極無之
- (ハ) 近来相滞候間、於御役所取立有之候様、天明七未年十月戸田因幡守勤役中被申立、

37 梅園家

- (イ) 前長橋故小宰相典侍局在勤中之拝領金、
- (ロ) 元高極無之处、
- (ハ) 相滞候節者於御役所取立有之候様、宝曆七寅年被申立、
- (ホ) 當時右貸附相止候、

38 姉小路家

- (イ) 先代傳奏役二而、年々参府之節、御所御臺所より銀五貫目宛拝借、帰京之上銀貳貫目ツ、上納、殘銀三貫目宛、高三拾六貫目、
- (ロ) 元高極無之
- (ハ) 右拝借銀返納方為助成、貸附之儀被相願候处、天明三卯年四月所司代牧野備後守勤役中承届候、右貸附先滞候節者、於御役所取立之儀被申立、

39 醍醐家

- (イ) 一条前関白殿より被讀請候西賀茂川上村下屋鋪修復料銀、
- (ロ) 元高極無之、
- (ハ) 天明三卯年所司代牧野備後守勤役中、此以後仕来之通、貸附相滞候節者、於御役所取立有之候様、猶又被申立、

40 勸修寺家

- (イ) 納戸銀
- (ロ) 元高之儀極無之、
- (ハ) 相滞候節者、於御役所取立有之候様、宝曆十辰年被申立候、委細之儀者難相分、其後取立之儀被申立候儀無之、

41 仏光寺門跡

- (イ) 從東福門院様 源信解院宮、右門跡江御寄附御法事料并一山之祠堂銀等
- (ロ) 銀高極無之、
- (ハ) 返済相滞候節ハ取立有之候様、宝曆八寅年七月御役所江被申立、

42 常住金剛院

- (イ) 先年從関東被仰付、於山門横川御精進代相勤候節之御祈禱料

43 養源院

- (三) 當時貸附金銀一切無之、
- (イ) 拝借相願候处、安永七戌年銀百枚被下置候

(ロ) 取繕いたし、残銀并勅化物等除置、少々宛も貸付
置候儀ニ付、銀高極無之、

(ハ) 右貸附相滞候節者取立之儀、明和六丑年六月より御役
所江被申立候

44 光雲寺

(イ) 東福門院為御供養料被下置候御祠堂金千両
并延享三寅年於大坂勸化寄金百五拾両差加

(ハ) 宝曆三酉年二月於寺社奉行所、願之通相濟候ニ
付、右貸附相滞候節者、於御役所取立之儀、相願候

45 靈源寺

(イ) 年々從御所御祈禱料等被下(東福門院様／文照院様)
御祠堂金等

(ロ) 都合五千百三拾両

(ハ) 借請候者者元利極之通返済有之候様觸流之儀、
并右貸附方万一相滞候節者於御役所取立有之候様、

宝曆十一巳年十一月於寺社奉行所、願之通相濟候
昌林院 (梅溪家菩提所)

(イ) 至心院様御位牌被相納置候ニ付、永々御菩提為御供料、
御内々從關東、梅溪家江金百両被致拝領候、

(ロ) 右百両之外貸附無之様被仰渡候、

(ハ) 相滞候節者、取立之儀御役所江可申立旨、明和五子年
梅溪家より所司代阿豊後守殿江被申上候、

47 高台寺

(イ) 後西院為御菩提疊華院宮より御祠堂金式百□□

高臺院御香奠銀御遺金等合百貫目余

(ハ) 若相滞候ハ、於御役所取立之儀、宝曆八寅年願出
承届候、

48 円福寺

(イ) 御所御代々被下置候御祠堂金銀
(ロ) 尤元高極り候儀無之

(ハ) 返済相滞候節者、於御役所取立之儀、宝曆九卯年相願
承届候、

補訂

前号「祠部職掌雜纂 諸門跡系譜」
10 仁和寺御門跡

宇多法皇「類」寛平法皇「静」御戒師
益信僧都「類」御戒師權大僧都益信

「統」御戒師圓城寺益信「弘」御戒師
圓城寺益信、「静」同十五日於東大寺

灌頂「統・弘」同十五於東大寺灌頂
「静」十一廿四同受戒「統・弘」十一

廿四於同寺受戒「静」延喜十幸天台
增命坊重受灌頂「統」延喜十六七八

幸天台增命方受法灌頂「弘」延喜十
六廿八幸天台增命坊受法灌頂、「静」

次戒壇廻心受戒「統」次御戒壇圓心
受戒、「弘」次御戒壇廻心受戒、

「静」光孝天皇第三皇子「類・統・弘」
光孝帝第三皇子、「静」承平九七八

崩六十五「類」承平元辛卯七十九崩

六十五歳「弘」承平元七十九崩六十
八才、

寛空僧正「類」(不記載)、「静」統・蓮
臺寺「弘」運臺寺、「静」内別人「青・

統・弘」内州人、「静」天禄三二六化
「統・弘」天禄三二六寂「静」八十九

「統」八十九歳「弘」八十九才

寛朝大僧正「弘」寛朝僧正、「類」(不
記載)、「静」申「統」號「弘」号「静・

統」右大臣雅信弟、重信兄「弘」雅信
弟、重信兄「静」一品式部卿敦実親

王一男、法皇御孫「統・弘」一品式部
卿敦實親王孫、「静」長徳四六十二化

「統・弘」長徳四六十二寂、

濟信大僧正「類」(不記載)、「静」申
「統」號「弘」号、「静」又名其玄院大僧

正「統・弘」又眞言院大僧正「静・

統」一條左大臣源雅信公「弘」一条左

大臣雅信公〔靜〕三男〔統・弘〕第三息〔靜〕教実親王孫〔統・弘〕教實親王息、

性信親王〔類・統・弘〕性信准三后、

〔靜〕申〔統〕號〔弘〕号、〔靜・統・弘〕

俗名師明〔類〕師明親王、〔靜・類三條院〔統・弘〕三條院、〔靜・統・弘〕

第四御子〔類〕第四皇子、〔靜〕春宮時御子也〔統・弘〕春宮之時之御子也

〔靜〕應德二九廿七化〔統・弘〕應德二九廿七寂、〔靜〕六十一〔類・統〕八十一歳〔弘〕八十一才、

覺行法親王〔類・統〕覺行法親王、

〔靜〕元覺念〔類〕本覺念〔統・弘〕本名覺念、〔靜〕法親王始也〔類〕出家皇子稱親王事、堀川院御宇始也〔統・弘〕法親王宣旨自此始也〔靜〕三品

〔類・統・弘〕二品、〔靜・統・弘〕白河院〔類〕白川院、〔靜〕第三御子

〔類・統・弘〕第三皇子、〔靜・統・弘〕母典侍經子、〔靜〕經平卿女〔類〕藤原經平卿女〔統・弘〕太宰大貳經平卿女、

寬助大僧正〔類・統・弘〕〔不記載〕、

覺法法親王〔類・統〕覺法法親王、

〔靜〕真行改行真〔類〕本行眞、又眞行〔統〕本名行眞、又改眞行〔弘〕行眞又改眞、〔靜・類〕白川院〔統・弘〕白河院〔靜〕第四御子〔類・統・弘〕第四

皇子〔靜〕仁平三十二六滅〔類〕仁平三年十二月六日寂〔弘〕仁平三十二六寂〔統〕六月十二日〔類・統〕六十三歳〔弘〕六十二才、

覺性法親王〔類・統〕覺性法親王、

〔靜〕俗名本仁、又信法〔類〕本名信法、俗名本仁親王〔統・弘〕本名信法、〔靜〕又泉殿御室〔統〕又號泉殿御室〔弘〕号泉殿御室〔靜〕嘉應元十二一滅〔類〕嘉應元年十二月十一日寂

守覺法親王〔類・統〕守覺法親王、

〔靜〕統喜多院御室〔類〕北院御室〔弘〕喜多院御室一本北院〔靜〕守性改守覺〔統・弘〕本名守性、〔靜・類〕後白川院〔統・弘〕後白河院〔靜〕第二皇子〔類〕第四皇子、〔靜〕建仁二八廿五滅〔類〕建仁二八廿五入滅、五十三歳〔統〕建仁二八廿五寂五十三歳〔弘〕建仁二八廿九寂五十三才、

道法法親王〔靜〕尊性改道法〔類〕本尊性〔統・弘〕本名尊性、〔靜〕又申〔青〕又字、〔靜〕後白川院第八皇子〔類〕同帝第九皇子〔統・弘〕後白河院第九皇子、〔靜〕母三條法印應仁女〔類〕母三條局、法印應仁女〔統・弘〕母三條局、法眼應仁女、〔靜〕建保二十一廿一滅〔統〕建保二十一廿一入滅〔統・弘〕建保二十一廿一寂、

道助法親王〔靜〕三品〔統・弘〕二品、〔靜〕第二御子〔統・弘〕第二皇子〔類〕第六皇子、〔靜〕宝治〔青〕口治、〔靜〕宝治二正十六滅〔弘〕宝治二正十六寂〔類〕實治三年正月十五日入滅〔統〕實治三正十六寂、

道深法親王〔靜・統〕金剛定院御室〔類〕金剛定院〔靜〕又申〔統〕又號〔弘〕又号、〔靜・統・弘〕第二皇子〔類〕第三皇子、〔靜〕母北白川院基家卿女〔類〕母北白川院准三后從三位陳子、入道中納言基家卿女、〔統・弘〕母前中納言基家卿女、

法助准后〔類〕法助准三后〔靜〕開田御室〔統・弘〕開田院御室、〔靜〕光明峯寺入道關白〔類〕光明峯寺攝政關白〔統〕九條殿光明峯寺入道攝政關白〔弘〕九條殿光明峯寺入道攝政關白〔靜・弘〕息〔類〕七男、〔靜〕弘安七十一廿七滅〔弘〕弘安七十一廿七寂四十六才〔類〕弘安七年十一月廿一日入滅〔統〕弘安七年十一月廿一日寂、

性助法親王〔靜〕又申甘露王院御室〔統〕又號甘露王院〔弘〕又号甘露王院、〔靜〕後嵯峨院第六御子〔類・統・弘〕後嵯峨院第九皇子、

性仁法親王〔靜〕滿仁〔類・統〕滿仁、〔靜〕後深草院第四御子〔類・統・弘〕後深草院第四皇子、〔靜〕母成子〔類〕母玄輝門院、山階左大臣藤實雄公女〔統〕母玄輝門院藤原光子、山階左大臣實雄公女〔弘〕母玄輝門院藤原光子、山階左大臣實雄公女、

深性法親王〔靜〕尊勝院御子〔統・弘〕尊勝院御室〔靜〕大師十九世、法皇十五世〔統・弘〕大師廿世、法皇十六世、〔靜・統・弘〕後深草院第六皇子〔類〕同帝第六皇子、〔靜〕母從一位忠子、三善康衡女〔類〕母准后從一位三善忠子、三善康衡女、〔統・弘〕母從一位三善忠子、三善康衡女、〔靜〕正安元六十滅〔類〕正安元年六月七日入滅、二十五歳〔統〕正安元六七寂〔弘〕正安元六七寂廿五才、

禪助大僧正〔類・統・弘〕〔不記載〕、

實性法親王〔靜〕大師十九世、法皇十五世〔統・弘〕大師廿一世、法皇十七世〔靜〕又申惠命院御室〔統〕又號惠命院〔弘〕又号惠命院〔靜〕伏見院第三御子〔類・統・弘〕伏見院第三皇子、

法守法親王〔靜〕大師十九世又廿世、法皇十五世又十六世〔統・弘〕大師廿二世、法皇十八世、

法仁法親王〔類〕〔源性法親王の後に〕〔靜〕大師廿世、法皇十六世〔統・弘〕

〔靜〕座主〔青〕座、
 勝覺權僧正〔類・弘〕勝覺權僧正
 〔統〕元祖權僧正勝覺〔靜〕天喜九誕
 〔類〕天喜五年誕生〔弘〕天喜五年月
 日誕生〔靜〕覺深〔弘〕覺深〔靜〕
 類・弘堀川左大臣源俊房〔統〕左大
 臣俊房〔靜・統・弘〕息〔類〕男〔靜〕
 大治四四一〔類〕大治四四朔〔弘〕大治
 四四一〔靜化〕類〕寂、七十三歲
 〔弘〕寂七十七才、
 定海大僧正〔統〕大僧正定海〔靜〕承
 保元誕〔類〕承保元誕生〔統〕承保元年
 月日誕生〔弘〕承保元生〔靜〕定資
 〔弘〕定資〔靜〕應保〔弘〕應德〔靜〕
 弘六條右大臣顯房〔類〕右大臣源顯
 房〔統〕右大臣顯房〔靜〕大治四四一
 卒七十三〔衍〕類・弘久安五四十二
 寂、〔類〕七十六歲〔弘〕七十六才、
 元海大僧都〔統〕大僧都元海〔靜〕寬
 治七誕〔類〕寬治七年誕生〔統〕寬治七
 年月日誕生〔弘〕寬治七年〔靜〕勝覺
 〔弘〕勝覺〔靜〕廿三〔弘〕廿二、〔靜〕
 大納言源雅俊卿〔類・弘〕京極大納
 言源雅俊卿〔統〕大納言雅俊、〔靜〕
 統・弘〕息〔類〕男、〔靜〕弘久安五四
 十二〔衍〕類・弘保元元八十八〔靜〕卒
 七十六〔衍〕類・弘寂六十四歲〔弘〕寂七
 十六才〔衍〕、
 實運權少僧都〔類・弘〕實運少僧都
 〔統〕權少僧都實運、〔靜〕長治元誕
 〔類・弘〕長治元生〔統〕長治元年月
 日誕生〔靜〕勝覺僧正舍弟〔類〕勝覺
 僧正之舍弟〔統〕勝覺僧正舍弟〔弘〕
 勝覺舍弟〔靜〕左大臣源俊房公〔類〕
 堀川左大臣源俊房〔統〕左大臣俊房
 公〔弘〕俊房〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 勝覺權僧正〔類・弘〕勝覺權僧正
 〔統〕僧正勝覺、〔靜〕保延四誕〔類〕保
 延四二十八誕生〔統〕保延四年二月
 十八日誕生〔弘〕保延四生、〔靜〕少納
 言藤通憲〔類〕少納言藤原通憲弘小納
 言西〔統〕少納言藤原通憲弘〔類〕小納
 言藤原通憲、〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 實繼大僧都〔類・弘〕實繼權大僧都
 〔統〕大僧都實繼、〔靜〕久壽元誕〔弘〕
 久壽元生、〔靜〕大納言公保卿〔類〕權
 大納言藤公保卿〔統〕大納言公保
 〔弘〕權大納言公保卿〔靜・類〕男
 〔統・弘〕息
 成實權僧正〔類・弘〕成實權僧正
 〔統〕權僧正成實〔靜〕應德二誕〔類〕
 應保二生〔統〕應保二年月日誕生
 〔弘〕應保二生、〔靜〕民部卿中納言藤
 成範卿〔類〕權中納言藤成範卿〔統〕
 民部卿中納言成範弘權中納言藤
 原成範卿、〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 良海權少僧都〔類・弘〕良海權少僧
 都〔統〕權少僧都良海、〔靜〕元海資
 〔類〕元海大僧都實〔靜〕月輪攝政兼
 實〔類〕九條月輪攝政兼實〔統〕九條
 兼實〔弘〕九條殿月輪攝政兼實、
 〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 聖海親王〔類・弘〕聖海法親王〔統〕
 聖品親王聖海、〔靜〕性明親王〔類〕
 弘大炊御門宮性明親王〔統〕性明親
 王〔靜・統・弘〕息〔類〕男、〔靜〕孫
 〔類〕御孫、〔靜〕法名聖直〔類・統・
 弘〕法名聖眞、
 勝尊權僧正〔類・弘〕勝尊權僧正
 〔統〕權僧正勝尊、
 〔靜〕松殿攝政師家公息〔類〕中山攝
 政內大臣藤師家〔統〕松殿小殿下息
 師家公云々〔弘〕松殿小殿下息 師家
 公云々、
 憲深權僧正〔類・弘〕憲深權僧正
 〔統〕權僧正憲深、〔靜〕建久三誕〔類〕
 建久三年生〔統〕建久三年月日誕生
 〔弘〕建久三生、〔靜〕侍從大納言成道
 卿〔類〕弘〕侍從通成〔靜・統〕
 息〔類〕男、
 定濟大僧正〔類・弘〕定濟大僧正
 〔統〕大僧正定濟〔靜〕承久三誕〔類〕
 承久二年生〔統〕承久二年月日誕生
 〔弘〕承久二生、〔靜〕類・統〕土御門
 〔弘〕上御門、〔靜・類・統〕內大臣
 〔統〕內府〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 定勝權大僧都〔類・弘〕定勝權大僧
 都〔統〕權大僧都定勝、
 〔靜〕寬元三誕〔類〕寬元三年誕生
 〔統〕寬文三年月日誕生〔靜〕山階左
 大臣実雄〔類〕山科左大臣藤實雄
 〔統・弘〕山科左大臣實雄、
 道性權僧正〔類・弘〕道性權僧正
 〔統〕宮僧正道性〔靜〕弘安九誕〔弘〕
 弘安九生、〔靜・弘〕龜山院皇子〔類〕
 龜山院皇子〔統〕龜山院宮、
 聖業大僧正〔統〕大僧正聖業〔弘〕聖
 業大僧正〔靜・弘〕東大寺別當〔類〕
 東大別當〔靜・弘〕猪熊攝政〔類〕近
 衛猪熊攝政〔統〕猪熊大殿〔靜〕家実
 〔類・弘〕家實、〔靜〕五十三〔類〕五十
 一歲〔弘〕五十三才、
 聖雲法親王〔統〕無品親王聖雲、
 〔靜・弘〕龜山院皇子〔類〕龜山院皇
 子〔統〕龜山院宮、
 定任權僧正〔類・弘〕定任權僧正
 〔統〕權僧正定任〔靜〕弘長二誕〔類〕
 弘長二年生〔統〕弘長二年月日誕生
 〔弘〕弘長二生、〔靜〕統〕中御門帥大
 納言類中御門權大納言藤原弘
 中御門大納言藤原〔靜・統・弘〕息
 〔類〕男、
 賢助大僧正〔統〕大僧正賢助、〔靜〕弘
 安二誕〔類・弘〕弘安三生〔統〕弘安三
 年月日誕生〔靜〕洞院太政大臣類
 太政大臣藤原〔統〕太政大臣公守

四一生〔続〕永和四二月日誕生〔弘

〔類〕征夷大將軍贈太政大臣〔続〕將

義演准后〔類・引〕義演准三后〔綱〕

〔弘〕定演大僧正

14 勸修寺御門跡〔静〕延喜帝母后

〔類〕延喜帝后母〔弘〕醍醐帝后母、
〔靜〕藤高藤〔類・弘〕高藤、
承俊律師〔類・統〕〔不記載〕、
濟高大僧都〔類〕濟高大僧都〔統〕大
僧都濟高〔弘〕濟高大僧正〔靜・類〕
聖宝尊師實〔弘〕聖宝弟子〔靜〕延喜
十八年九任勸修寺長吏、東寺長者〔類〕
延喜十八年八月九日任長吏〔統〕延喜
十八年八月九日任長吏職〔延喜十六
年十二月廿七日直任〔東寺〕一長者
〔弘〕延喜十八年九任東寺長者・勸修
寺長吏〔靜〕五十一廿五寂〔類・弘〕
五十一廿五寂〔統〕五年一月廿五日
卒、〔靜〕八十六〔類〕八十六歲〔統〕九
十一歲〔弘〕八十六才、
貞譽權律師〔類・弘〕貞譽權律師
〔統〕律師貞譽〔靜・類〕承俊律師實
〔弘〕承俊入室之弟子〔靜・類〕長吏
〔統〕補勸修寺檢校〔弘〕東寺長者・
勸修寺長吏〔靜〕仁和三十一廿二化
〔統〕〔天慶七年〕七月八日卒七十二
歳、
遍覺大師〔弘〕遍覺大法印、〔類・
統〕〔不記載〕〔靜〕八條大將保忠息
〔弘〕八條大將息、
雅慶大僧正〔統〕大僧正雅慶〔靜〕一
品式部卿敦美親王〔類〕敦實親王
〔統・弘〕一品式部卿敦實親王〔靜・
類〕男〔統・弘〕息〔靜〕長和元十四五

寂〔類・弘〕長和元十五廿五寂〔統〕長
和元年十月廿五日卒、〔靜〕八十一
〔類〕八十一歳〔統〕八十七〔弘〕八十
才、
濟信大僧正〔類・弘〕濟信大僧正
〔統〕大僧正濟信〔靜・類〕同男〔弘〕
同息〔統〕右大臣源雅信公息〔靜〕長
元三十一寂七十一〔統〕長元三年六
月十一日卒七十七〔弘〕長元三十一
寂七十一
深覺大僧正〔類・弘〕深覺大僧正
〔統〕大僧正深覺〔靜〕寬忠僧正実
〔類〕寬忠僧正實〔靜・弘〕師輔類、
統藤原師輔〔靜・類〕男〔統〕十一
男〔弘〕息〔靜〕長久四十九六寂八十九
長久四年九月十四日卒八十九〔弘〕長
久四十九六寂八十九才、
信覺大僧正〔類・弘〕信覺大僧正
〔統〕大僧正信覺〔靜〕覺源僧正實
〔類〕覺源僧正實〔靜・弘〕又〔青〕文、
〔靜〕仁海受法〔類〕仁海僧正受法、
〔靜・類〕弘・閑院太政大臣〔統〕太政
大臣〔靜・類〕統男〔弘〕息〔靜〕忠
德元九十五入〔青〕忠德元廿十五入
〔類・弘〕應德元九十五寂〔統〕應德
元年九月十五日卒、
嚴覺大僧都〔類・弘〕嚴覺大僧都
〔統〕大僧正嚴覺〔靜〕參議從三位御

子宰相〔類〕御子宰相〔統〕三木〔弘〕
參議從三位、〔靜・弘〕源基平〔類・
統〕源基平卿〔靜・類・統〕男〔弘〕
息、
寬信大僧都〔統〕法印權大僧都寬信、
〔靜〕藤為房〔類・弘〕為房〔統〕為方
雅實大僧都〔類〕雅實大僧都〔統〕法
印大僧都雅實〔弘〕雅實大僧都〔靜〕
權中納言藤原顯類卿〔類〕權中納言藤
原顯類〔統〕中納言顯類卿〔弘〕權中納
言藤原顯類卿、〔靜・類・統〕男〔弘〕
息、
成實大僧正〔統〕大僧正成實〔統〕大
僧正成實〔弘〕成實大僧正〔靜〕顯密
兼学人〔弘〕顯密兼学云々〔靜〕顯密
別當入道惟方〔類〕葉室別當藤惟方
〔統〕別當雅房〔弘〕藤原惟方卿、
〔靜・類〕男〔統・弘〕息、
聖基大僧正〔統〕大僧正聖基〔靜〕号
南谷僧正〔類〕號南谷僧正〔統〕又南
谷僧正ト云〔靜〕大覺寺左大臣藤隆
忠公〔類〕大覺寺左大臣藤隆忠〔統〕
左大臣隆忠公〔弘〕大覺寺左大臣隆
忠公、
道宝大僧正〔類〕道寶大僧正〔統〕大
僧正道寶弘〔道宝大僧正〔靜〕法務
〔統〕文永五年六月廿八日補法務、
〔靜〕八條左大臣藤類八條左大臣
藤・統・弘〕八條左大臣〔靜・弘〕息

〔類・統〕男、
勝信大僧正〔統〕大僧正勝信、
〔靜・弘〕東寺長者〔統〕弘安三年
八月六日加任長者 宣下、〔靜・弘〕
東大寺別當〔統〕弘安三年八月四
日補東大寺別當、〔靜〕光明峯寺撰關
通家〔類〕光明峯寺攝政道家〔統〕法
明峯寺入道殿下〔弘〕九条殿光明峯
寺関白道宗〔靜・弘〕息〔類・統〕男、
〔靜〕十四七入滅五十二〔類〕十四七寂
五十歳〔統〕十年七月四日卒五十三
〔弘〕十四七寂五十二才、
道淳大僧正〔類〕道淳法印〔統〕大僧
正道淳〔靜〕円明寺撰関実經〔類・
統〕一條攝政関白實經〔弘〕一条圓明
寺関白實經〔靜・弘〕息〔類・統〕男、
信忠大僧正〔統〕大僧正信忠〔靜〕号
若宮大僧正〔類〕號若宮大僧正〔弘〕
号若宮僧正、〔靜〕一音院撰関〔類・
統〕九条関白〔弘〕九条殿関白、〔靜・
弘〕息〔類・統〕男、
教寬大僧正〔統〕大僧正教寬〔靜〕報
恩院関白〔類・統〕九條関白〔弘〕九
条関白〔靜・弘〕息〔類・統〕男、
寬胤大僧正〔類・弘〕寬胤法親王
〔統〕二品法親王寬胤〔靜・弘〕号後
安祥寺殿〔類・統〕號後安祥寺殿
〔靜〕後伏見院殿〔類・統・弘〕後伏見
院皇子、

尊信大僧正〔類・弘〕尊信法親王
 〔統〕無品親王尊信〔靜〕号後宝泉院殿〔類・統〕號後寶泉院殿、〔靜・類〕常磐井親王恒明男〔統〕常磐井一品恒明親王御子〔弘〕常磐井一品親王恒明息、〔靜〕龜山院孫〔類〕龜山法皇御孫〔統〕龜山院御孫〔弘〕龜山法皇孫〔靜・類・統〕後醍醐院〔弘〕後醍醐帝、
 興信大僧正〔類・弘〕興信法親王〔統〕無品法親王興信〔靜・類〕崇光院皇子〔統〕本院崇光院第二皇子〔弘〕崇光院第二皇子、
 尊興准后〔青〕高興准后〔類・弘〕尊興准三后〔統〕准三后尊興〔靜・類・統〕無品彈正尹〔弘〕常磐井無品彈正尹、〔靜・弘〕滿仁親王〔類・統〕滿仁親王〔靜・類〕男〔統〕御子〔弘〕息、興胤權僧正〔類・弘〕興胤權僧正〔統〕權僧正興胤〔靜・類〕同男〔統〕同親王御子〔弘〕同息、
 尊聖大僧正〔統〕大僧正尊聖〔靜・類〕弘玉川宮〔統〕玉河宮〔靜・類〕男〔統〕御猶子〔弘〕息、〔靜〕皇孫〔類〕御彥弘曾孫、
 教尊權僧正〔類・弘〕教尊權僧正〔統〕權僧正教尊〔靜・類〕男〔統〕御子〔弘〕息、〔靜〕後醍醐院五世孫〔類〕同帝之玄孫〔弘〕後醍醐帝五世孫、

恒弘法親王〔統〕無品法親王恒弘〔靜・類〕統直明王〔弘〕常磐井直明王、〔靜・類〕統男〔弘〕息、〔靜〕崇光院〔類・弘〕統後崇光院〔靜・類・統〕御猶子〔弘〕猶子、
 常信法親王〔統〕無品法親王常信〔靜〕改寬円〔類・弘〕改寬圓〔統〕改常弘〔靜〕後大通院〔類・弘〕伏見殿〔統〕伏見式部卿、〔靜・類〕男〔統〕御子〔弘〕息、
 海覺法親王〔統〕無品法親王海覺〔靜〕安養院〔類・弘〕伏見殿〔統〕伏見、〔靜・類〕男〔統〕御子〔弘〕息、〔靜・統〕弘御猶子〔類〕爲御子、寬欽法親王〔統〕無品法親王寬欽〔靜〕妙莊嚴院〔類〕伏見殿〔統〕伏見〔弘〕同〔伏見殿〕妙莊嚴院、〔靜・類〕男〔統〕御子〔弘〕息、〔靜・統〕弘御猶子〔類〕爲御子、
 聖信准后〔類・弘〕聖信准三后〔統〕准三后聖信、〔靜〕唯心院閑白〔類・統〕一條關白左大臣〔弘〕一條唯心院閑白〔靜・類・統〕男〔弘〕息、
 寬海大僧正〔統〕大僧正寬海〔靜〕号後施無院殿〔統〕號後施無畏院殿〔弘〕号後施無院殿、〔靜・類・弘〕花山院左大臣〔統〕左大臣〔靜・弘〕息〔類・統〕男〔靜〕自淨心院閑白〔類・統〕一條關白〔弘〕一條殿閑白、〔靜・

弘〕猶子〔類〕爲養子〔統〕養子〔靜〕萬治二十三年〔類〕萬治二己亥十二月十三日寂〔統〕萬治二十二年十二月十三日薨〔弘〕萬治二十三年寂、
 寬俊權大僧正〔類〕寬俊〔統〕大僧正寬俊弘〔寬俊大僧正、〔靜〕萬治元九十二得度〔類〕萬治元戊戌九月十二日出家〔統〕萬治元年九月十二日得度〔弘〕萬治元九十二得度、〔靜〕十〔類〕十一歲〔統〕十〔弘〕十一才、〔靜〕号後觀長院殿〔統〕號後觀長院殿〔弘〕号後觀長院、〔靜〕本源自性院閑白〔類〕近衛殿攝政關白〔統〕近衛關白弘〔近衛殿閑白〔靜・弘〕息〔類〕御子〔統〕男、
 〔類〕以下未記載〕
 濟深法親王〔統〕一品法親王濟深〔弘〕濟深法親王〔靜・弘〕俗名寬清〔統〕本名寬濟〔靜〕仙洞第一皇子〔統〕仙洞一宮〔弘〕法皇識仁第一宮、〔靜〕母小倉大納言実起卿女〔統〕御母新上西門院實小倉故前大納言實起卿女中納言典侍殿弘〔母中納言典侍、前大納言實起卿女〔靜・弘〕十二月十四日薨〔統〕元祿十四年十二月二日薨〔靜〕三十一才〔統〕三十一〔弘〕卅一才、
 尊孝法親王〔統〕無品法親王尊孝〔靜〕伏見〔統〕伏見一品〔弘〕伏見殿、

〔靜・統〕御子〔弘〕息、〔靜・統〕法皇御猶子弘〔靈元院爲御養子、〔弘〕寬宝法親王有記事、〔弘〕濟範法親王有記事、
 16大乗院御門跡〔類〕南都大乗院殿〔統〕大乗院門跡〔弘〕法相宗大乗院御門跡〔弘〕寬治元二隆禪僧都建立隆禪權大僧都〔類・弘〕隆禪權大僧都〔統〕隆禪權大僧都〔靜・弘〕大乗院本願〔類・統〕大乗院本願〔靜・弘〕長谷寺・大安寺別當〔類〕長谷寺、又大安寺別當、〔靜〕左少將藤原政兼朝臣〔青〕左少口原口兼朝臣〔類〕左少將藤原政兼〔統〕從五位下左少將政兼弘〔左少將政兼〔靜・統〕息〔類・弘〕男、〔靜・類〕兼貞孫〔靜〕母從三位濟政女〔類・統〕母從三位濟政女弘〔母從三位濟政女〔靜〕康和七十四遷化〔類〕康和二年七月十四日寂〔統〕康和二年七月十四日入滅〔弘〕康和七十四寂〔靜・統〕六十三〔類〕六十三歲〔弘〕六十三才、
 類實權少僧都〔類・弘〕類實權少僧都〔統〕類實權少僧都〔靜〕類實〔青〕類實、
 尊範大僧正〔統〕尊範法務大僧正、

〔靜・弘〕号内山〔類〕號内山僧正
 〔統〕圓山〔靜〕又号禪定院〔統〕號大
 乘院入又〔禪〕定院〔靜・弘〕興福
 寺・長谷寺別當〔類〕興福寺・又長谷
 寺別當〔統〕興福寺別當〔靜〕京極撰
 關〔類〕後宇治攝政〔統〕後宇多院關
 白太政大臣〔弘〕京極撰政關白、
 〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 信圓大僧正〔統〕信圓法務大僧正、
 〔靜〕一乘院兼帶〔類〕一乘院兼帶
 〔統〕始住一乘院管領〔弘〕一乘院兼
 帶〔靜・弘〕法性寺關白〔類〕法性寺
 攝政關白太政大臣〔統〕法性寺、
 〔靜・統・弘〕忠通〔青〕忠道〔靜・
 統・弘〕息〔類〕男、
 實尊大僧正〔類・弘〕實尊大僧正
 〔統〕實尊法務大僧正〔靜〕興福寺・
 長谷寺別當〔類〕興福寺・又長谷寺別
 當〔統〕興福寺別當〔靜〕号禪定院中
 僧正〔青〕号禪定院口僧正〔統〕禪定
 院、號中僧正〔靜〕松殿撰關〔類〕松
 殿攝政關白太政大臣〔統〕松殿攝政
 關白〔弘〕松殿撰政關白〔靜・統・
 弘〕息〔類〕男、〔靜〕嘉禎三十九寂五
 十七才〔類〕嘉禎三十九寂五十七歲
 〔統〕嘉禎二年二月十九日入滅、
 圓實大僧正〔統〕圓實法務大僧正、
 〔靜〕興福寺・長谷寺・橘寺別當〔類〕
 興福寺・又長谷寺別當〔中略〕又橘寺

別當〔統〕興福寺別當〔弘〕又橘寺別
 當〔靜〕光明峯寺撰關〔類〕光明峯寺
 攝政關白〔弘〕光明寺撰政關白、
 〔靜・弘〕通家〔類〕道家〔靜・弘〕息
 〔類〕男、〔靜・類・弘〕母太政大臣公
 經公文女〔統〕母洞院相國公經公文
 〔靜〕文永十一〔廿六歲〕文永九十
 一〔廿六寂〕統文永九年十一月廿六
 日入滅〔弘〕文永元十一〔廿六寂〕、
 實信大僧正〔青・類・弘〕實信大僧
 正〔統〕實信法務大僧正、〔靜・弘〕葛
 川住持寺〔青〕葛川任寺〔靜〕一乘院兼
 帶〔弘〕一乘院兼帶〔靜〕信円僧正資
 〔青〕信円僧口口〔類〕信圓僧正資
 〔統〕一乘院尊信僧正弟子〔靜〕普賢
 寺撰關〔類〕近衛殿普賢寺攝政關白
 〔統〕近衛攝政關白〔弘〕普賢寺撰政
 關白〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 尊信大僧正〔統〕尊信法務大僧正、
 〔靜〕菩提院興福寺〔青〕菩提口口福
 寺〔靜〕菩提山別當〔青〕菩提口口
 口、〔靜〕興福寺・長谷寺・菩提山別
 當〔類〕興福寺・又長谷寺・菩提山別
 當〔類〕興福寺別當〔弘〕藥師寺又
 菩提山別當〔靜〕僧正資〔青〕僧口
 資〔靜〕洞院撰關〔類〕九條殿洞院攝
 政關白〔統〕九條攝政關白〔弘〕洞院
 撰政關白〔靜〕教実〔類・統・弘〕教
 實〔靜・統・弘〕息〔類〕男、

慈信大僧正〔統〕慈信法務大僧正、
 〔靜〕藥師寺〔青〕口口口、〔靜〕興福
 寺・又長谷寺・又菩提山別當〔類〕興
 福寺・又長谷寺・橘寺・又藥師寺別當
 〔統〕興福寺別當〔靜〕金峯山〔青〕山
 本〔弘〕山、〔靜〕尊信僧正資〔青〕口
 信僧正資〔統〕尊信資〔靜〕円明寺撰
 關〔青〕口口明寺撰關〔類〕一條殿圓明
 寺攝政關白〔統〕一條攝政關白〔弘〕
 圓明寺撰政關白〔靜〕実經〔類・統〕
 實經〔弘〕基經〔靜・統・弘〕息〔類〕
 男〔靜・弘〕正中元十二〔類〕正中元
 口十二〔統〕正中元十年十月二日、
 〔靜・統〕入滅〔類・弘〕寂、
 尋覺大僧正〔類・弘〕尋覺大僧正
 〔統〕尋覺法務大僧正〔靜〕興福寺・
 長谷寺・藥師寺・橘寺別當〔類〕興
 福寺・又長谷寺・又藥師寺・又橘寺別
 當〔統〕興福寺別當〔靜〕金峯山〔青〕
 口口山、〔靜〕後光明峯寺撰政〔類〕一
 條殿後光明峯寺攝政左大臣〔統〕一
 條攝政關白〔弘〕後光明寺撰政關白、
 〔靜・弘〕家經口息〔青〕家經口口
 〔類〕家經公男〔統〕家經公息、
 覺尊大僧正〔類〕覺尊大僧正〔統〕覺
 尊法務大僧正〔弘〕尋尊大僧正〔靜〕覺
 尊法務大僧正〔弘〕尋尊大僧正〔靜〕
 興福寺・長谷寺・藥師寺・橘寺別當
 〔類〕興福寺・又長谷寺・又藥師寺又
 橘寺別當〔統〕興福寺別當〔靜〕尋覺

僧正資〔青〕尋覺僧正口口〔類〕尋覺僧
 正資〔統〕尋覺大僧正資〔靜〕已心院
 撰關〔類〕九條殿淨土寺攝政關白
 〔統〕九條攝政關白左大臣〔弘〕九條
 殿淨土寺撰政關白〔靜・統・弘〕息
 〔類〕男、
 聖信權少僧都〔類・弘〕聖信權少僧
 都〔統〕聖信權少僧都〔靜・類〕慈信
 僧正資〔統〕慈信僧正入室〔靜・類〕
 嘉元二七十九〔統〕嘉元二年七月十
 九日〔弘〕嘉曆二七十九〔靜〕隱岐國
 〔類・統・弘〕隱岐國〔靜〕栖心院內
 大臣〔青〕栖心院內大臣〔統〕一條殿
 栖心院內大臣〔統〕一條內府〔弘〕一
 條殿栖心院內大臣〔靜〕內実〔類・
 統・弘〕內實〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 孝覺大僧正〔類・弘〕孝覺大僧正
 〔統〕孝覺法務大僧正〔靜〕興福寺・
 長谷寺・藥師寺・橘寺別當〔類〕興
 福寺・又長谷寺・又藥師寺・又橘寺別
 當〔統〕長谷寺・藥師寺・橘寺別當
 〔靜・弘〕〔青〕なし、〔靜〕後一音院
 ……〔青〕なし、〔靜〕後一音院關白
 〔類〕九條殿後一音院關白左大臣
 〔統〕九條左府〔弘〕九條殿後一音院
 關白〔靜〕房実〔類・統・弘〕房實、
 〔靜・統・弘〕息〔類〕男、
 〔類・弘〕孝尊大僧都有記事〔統〕
 孝尊大僧都〔有記事〕、

教尊大僧都〔類・統・弘〕（不記載）、
 「静」孝イ「青」□イ、
 教信權少僧都〔類〕孝信權少僧都
 「統」孝信權少僧都〔弘〕（孝尊大僧正
 の後に）、「静」長谷寺・橘寺別當
 「類」長谷寺・又橘寺別當、「静・弘」
 後報恩院開白〔類〕九條殿後報恩院
 開白左大臣〔統〕九條開白左大臣、
 「静」經教公息〔類〕經教公男〔統・
 弘〕經教公息、「静」実〔類・統〕實、
 「静」後照光院開白〔類〕後照光院開
 白左大臣、「静」冬通公息「青」冬通公
 □〔類〕冬通公男〔統〕冬通公子、
 孝尊大僧正〔統〕孝尊法務大僧正（孝
 尊大僧都の後に）「弘」（孝尊大僧都
 の後に）、「静・類」弘〔法務〕法務
 大僧正、「静」興福寺・長谷寺・橘寺
 別當〔類〕興福寺・又長谷寺・又橘寺
 別當〔統〕興福寺別當、「静・弘」一心
 院開白冬通公息〔類〕九條殿後報恩
 院開白左大臣經教公男〔統〕九條開
 白經教子、
 孝圓大僧正〔統〕孝圓大僧正、「静」興
 福寺・長谷寺・薬師寺・橘寺別當
 「類」興福寺・又長谷寺・又橘寺・又薬
 師寺別當、「静」孝尊僧正實〔類〕孝尊
 僧正附弟〔統〕孝尊附弟「静・弘」後
 報恩院開白〔統〕九條開白、「静」經教
 公息〔統・弘〕經教公息〔類〕同〔經教

公男、
 經覺大僧正〔統〕經覺大僧正〔類〕（不
 記載）、「静」号安位寺殿「青」□安位
 寺殿〔統〕隱居號安住寺「弘」号安位
 寺、「静」同後報恩院開白經教公息
 イ慈眼院開白政基公息、「統」九條開
 白左大臣尚經子「弘」同（後報恩院開
 白經教公息）、
 尋実〔統・弘〕尋実、「類」（不記載）、
 「静」後一縁院開白〔統〕九條開白右
 大臣「弘」後三縁院開白、
 尋尊大僧正〔統〕尋尊法務大僧正、
 「類」（不記載）、「静」法務〔統〕法務大
 僧正、「静」後成恩寺撰開〔統〕一條禪
 閣「弘」一條殿、
 政覺大僧正〔統〕政覺大僧正「弘」政覺
 大僧正、「類」（不記載）、「静・弘」大
 染金剛院開白持通公息〔統〕持通公
 息、
 慈尊〔類〕（不記載）、「静」後妙花寺開
 白〔統〕開白太政大臣「弘」後妙華寺
 開白、
 經尋大僧正〔統〕經尋法務大僧正、
 「静」法務〔統〕法務大僧正、「静」後慈
 眼院開白尚經〔類〕九條殿慈眼院開
 白左大臣政基〔統〕尚經「弘」九條殿
 慈昭院政基「静・統・弘」息〔類〕男、
 尋円大僧正〔統〕尋円法務大僧正〔類・
 弘〕尋円少僧都、「静」經尋僧正實

〔類〕經尋僧正實〔統〕經尋弟子、「静」
 同息〔類〕九條殿後慈眼院開白左大
 臣尚經公男〔統〕尚經公息「弘」九条
 殿尚經公息、
 「類」（以下未記載）
 尋憲大僧正〔統〕尋憲法務大僧正、
 「静」法務〔統〕法務大僧正「弘」從法
 務同前、「静・弘」後大染金剛院開白
 「統」二條開白太政大臣、
 義尊「弘」義尊大僧正、「静」靈陽院大
 納言義昭卿「青」靈陽院□納言義昭
 卿〔統〕征夷將軍准三后室町殿義照
 公「弘」征夷大將軍義昭公「静」又山
 「弘」久山「静」法源院高山「青」法□
 □□□、
 信尊大僧正〔統〕信尊前大僧正、「静」
 後法音院開白信房公〔統〕信房公
 「弘」鷹司殿後法音院開白信房公、
 信雅大僧正〔統〕信雅權僧正、「静」寺
 務再任「弘」寺務、
 「静」一致院左大臣〔統〕鷹司左府
 「弘」同（鷹司殿）一致院左大臣、
 「統」（以下不記載）
 信覺「弘」信覺大僧正、「静」後景暁院
 開白左大臣「弘」鷹司殿開白、
 隆尊「弘」隆尊大僧正、「静」元禄十五
 九十得度「弘」元禄（中略）十五九十
 得度、「静」信覺弟「弘」同鷹司殿開
 白房輔息、

〔弘〕隆遍大僧正（有記事）、
 〔弘〕隆範大僧正（有記事）、
 〔弘〕隆實大僧正（有記事）、
 〔弘〕隆温大僧正（有記事）、